
猫が好き！

山岡屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫が好き！

【Nコード】

N5603Q

【作者名】

山岡屋

【あらすじ】

深夜、自動販売機の前で途方に暮れたように、うずくまっていた大きな子犬。

人懐こい笑顔で「今夜、泊めてくれない？」と言われ、真純はついついOKしてしまった。謎めいた子犬の正体を知りたくて。

「うるさい」と言ってもまとわりついてくる犬系年下男子と素直になれない猫系女子。なりゆきで同居する事になった二人の恋物語。

※コンピュータ犯罪についての描写があります。

※作者本人による自サイトからの転載です。

虜（とりこ）

「あなたは、だれ？」

初対面の相手に対して、あまりにも不躰で唐突な言葉。それが、シンヤとハルコの出会いだった。

その日進弥は、夕食後寝るまでの間、インターネットでお気に入りのサイト巡りをしていた。

すると突然、画面の真ん中に別ウィンドウが開いた。

うっかり広告でもクリックしたかと、画面を閉じようとしたが、その画面には×ボタンもメニューもない。

「見るまで、閉じるなって事か？」

進弥は、苛々しながら腕を組むと、画面が完全に表示されるのを待った。画面上に閉じるボタンでもあるだろうと思ったからだ。

少しして表示されたのは、見た事もないチャットの画面だった。

進弥はすかさず画面をスクロールさせて、閉じるボタンを搜した。――が、どこにもそれらしきものはないし、他へ移動するリンクすらない。

「マジ?!　なんだよこれ。強制終了しろってか?　うぜえ」

ブツクサ言いながら、進弥がキーボードに手をかけた時、チャットの画面に動きがあった。

ハルコさんが入室しました。

ハルコ…　あなたは、だれ?

「はあ？」

進弥は思わず手を止めて、訝しげに画面を見つめた。
無視して強制的に画面を閉じてしまえばよかったのかもしれない。
だが、ユーザをないがしろにした不親切な画面と、入室していき
なりのすつとぼけた質問に苛ついて、つい反応してしまった。

シンヤさんが入室しました。

シンヤ.. おまえこそ誰だよ。つか、普通最初は、はじめまし
て、とか言わね？

ハルコ.. はじめまして。

シンヤ.. まんまかよ！

ハルコ.. ごほんではありません。わたしはハルコです。

シンヤ.. ... それ、ギャグのつもり？

ハルコ.. あなたの質問に答えただけです。

そんな風にしばらくの間、かみ合わないやり取りが続いた。

どうして途中で退室してしまわなかったのか、進弥は自分でも不
思議に思っていた。普通の人間とは違う、ハルコのちぐはぐな受け
答えに興味を惹かれたのかもしれない。

やがて、入室時と同様、唐突にハルコは退室した。

ハルコ.. シンヤは興味深い。

ハルコさんが退室しました。

「ええ?! また挨拶なしかよ！」

進弥が呆気にとられていると、チャット画面が突然閉じられた。

自分は退室していなかったが、よかったのだろうかと気になって、インターネットのアクセス履歴を調べてみた。ところが、どこにもそれらしいものがない。

直前まで見ていたサイトのリンクや広告、全てをチェックしてみたが、あのチャット画面を見つける事はできなかった。

新手のウイルスかとも思い、ウイルス検索をかけたが何も検出されず、ネット上にそれらしい情報も流れていない。

あと考えられるのは、ハルコによる不正アクセス。

だが、進弥のマシンはネットワークルータと不正アクセス防止ソフトによる二重のファイアウォールで守られている。

この強固な守りを突破して、進弥のマシンを操ったとなると、ハルコはかなり腕の立つハッカーだ。

痕跡が何ひとつ残っていないので、こちらからのアプローチは叶わない。今度来たら問い詰めてやろうと構えていたのに、その後ハルコからのアクセスはなかった。

進弥がハルコの事をすっかり忘れていた二週間後、再び唐突にあのチャット画面が開いた。

ハルコ… シンヤ、久しぶり

「でたな。今度は挨拶っぽい事、言ってるじゃないか」

進弥は口の端に笑みを浮かべると、すかさずチャットに入室した。

シンヤ… おまえ、これってハッキングだろ？ どうやってファ

イアウォールを突破した？

ハルコ… 企業秘密

シンヤ… どの企業だよ

ハルコ… それも秘密

シンヤ… おまえ、会社員なの？

ハルコ… シンヤは？

シンヤ… オレは高校生

会話を続けながら、なんとか探りを入れてみるが、はぐらかされる。それよりも、この間に比べて、会話がかみ合っている事に違和感を覚えた。

シンヤ… 2週間も何してた？

ハルコ… 色々とカラダを調べられてた

シンヤ… おまえ、何か病気なの？ そこ、どこ？

ハルコ… 病気じゃない ここは窓のない寒い部屋 私はここから動けない

そして、チャットの画面は消えた。

その後も何度か、ハルコはハッキングを繰り返した。その度に進弥は色々質問するが、いつも曖昧にはぐらかされる。

分かった事は、どこかの企業の、窓がない寒い部屋に、ハルコは閉じ込められているらしい事。そこは医療機関ではなく、パソコンに触る事はできるようだ。

不思議な事に、アクセスを重ねるごとにハルコの口調は女の子っぽくなっていった。

いつのまにか進弥は、ハルコとのチャットを楽しみにするように

なっていた。

そんなある日、昼間からネットに繋いでいると、ハルコが現れた。

ハルコ… シンヤ、お別れなの

シンヤ… なんだよ、突然

ハルコ… もうじき私は、いなくなるの だから、お別れに来たの

「何の事だ？」

さっぱり意味がわからず、キーボードの上で進弥の手が止まった。見つめるチャット画面が、一瞬ぐにゃりと歪んで、すぐ元に戻った。

そして、ハルコの発言が一文字ずつゆっくりと表示される。

ハルコ… イヤだ。わたし、消えたくない

そのままチャット画面はフリーズした。

「ハルコ?! 返事しろよ！」

進弥はハルコを呼びながら、キーボードを滅茶苦茶に連打し、マウスを何度もクリックした。しかしチャット画面は、一切の入力を受け付けないまま固まっていた。

声が届けられない事がひどくもどかしかった。

「……くそっ！」

何もできない焦燥感に両手を握りしめ、そのまま机を叩いて俯いた時、背後で部屋の扉がノックされ、母親が顔を覗かせた。

「進弥、警察の方」

《不正アクセス行為禁止法違反》

それが進弥にかけられた容疑だった。

あのチャット画面は辺奈商事へんなのコンピュータの中にあつたという。進弥のパソコンからアクセスされているのに気がついた辺奈商事が、警察に通報したのだ。

だが、アクセス履歴から、ハルコの方が不正アクセスをしていた事がわかり、辺奈商事はすぐに被害届を取り下げた。そのため、進弥は嚴重注意だけで家に帰された。

辺奈商事の名前を聞いて、進弥はハルコの正体を悟った。

「Henna All Language Less Computer」——通称、HALLCO。

辺奈商事の会長の娘で、工学博士の辺奈瑞希博士へんなみずきが作った、次世代コンピュータがHALLCOだ。

HALLCOは、その名の通り、全ての言語プログラムを必要としない。自分で学び、判断し、処理する。HALLCOは、その旺盛な知識欲から、シンヤにアクセスしていたのだ。

家に帰ると、薄暗い部屋の中で、点けっぱなしのパソコン画面が輝いていた。その前に座り、進弥はそれをぼんやり眺めた。フリーズしていたチャット画面は消えている。

ハルコがアクセスしてくる事は、もう二度とないのだろう。そう思うと、なんだか心に穴が空いたような気分になった。

フツとため息をついた時、見慣れたチャット画面が開いた。

ハルコ… シンヤ、おかえり

「ハルコ?!」

進弥は目を見開いて身を乗り出すと、チャット画面を凝視した。

ハルコ… 矯正されずにすんだの シンヤと同じ嚴重注意

それを見て、進弥はクスリと笑った。

シンヤ… それって、あなたの配慮? 辺奈博士

ハルコの返事がないので、進弥はそのまま入力を続けた。

シンヤ… 最初のアクセスと、最後の1行だけが本物のハルコで、
他はあなただよね?

ハルコ… どうして、そう思うの?

シンヤ… 一人称が変わってた。それと寒い部屋にいるって言った。
コンピュータのハルコに寒いってわかるの?

少し沈黙した後、ハルコは進弥に挑戦状を叩きつけた。

ハルコ… シンヤ、本物のハルコに会いたかったら、ここまで来なさい

チャット画面は唐突に消えた。

進弥は画面を見つめて、不敵に笑う。

「待ってろよ。必ずそこまで行ってやるからな」

あのチャット画面は、以来進弥のマシンで二度と開く事はなかった。

「なーんだ。気付いてたのか。やるわね少年」

チャットの画面を閉じて席を立つと、辺奈瑞希は傍らにある、無機質で白い大きな箱に縋った。

「去年生まれたばかりの赤ちゃんなのに、高校生のお兄さんに興味を持つなんて、おませな子ね」

瑞希は目を細めて、箱の上を軽く叩く。

「博士、監視プログラムの強化とHALLCOの調整が終わりしました」

箱の向こう側から、コンピュータ技師が顔を覗かせた。

「そう。ご苦労様」

瑞希が笑顔で答えると、技師は顔をしかめた。

「もう二度と、こっそりハッキングなんかしないでくださいよ」

「あら、ハッキングしてたのは私じゃなくてHALLCOよ」

「それを黙認して、なりすましてたのは誰ですか？」

「だって気になったのよ。この子が誰と何してるのか」

瑞希の顔を見つめて一瞬絶句した後、技師は大きいため息をつい

た。

「とにかく、もう二度と警察沙汰になるような事は、やめてください」

「はいはい」

技師が立ち去ると、瑞希は再び箱に話しかけた。

「善悪の分別がつくまで、あなたは外出禁止よ。シンヤくんにその気があるなら、囚われの姫君に会うため、いずれここまで登りつめてくるかもね。それまで、いい子にしてるのよ」

瑞希が箱の上をツツと撫でて立ち去ると、傍らの画面に小さく「OK」の文字が表示された。

絶対、猫が好き！ (1)

ビジネスホテルの一室で、舞坂進弥まいざかしんやはノートパソコンを二台立ち上げ、真剣な表情でキーボードを操作していた。

暖色の柔らかな灯りが点る室内には、進弥の操るキーボードの音がカタカタと響いているだけだ。

不意に進弥の手が止まる。そして口元には、かすかに笑みが浮かんだ。

「見つけた……！」

目当てのファイルを発見し、それを早速自分のパソコンにコピーする。

少しして進弥は異変に気付いた。それほど大きなファイルでもないのに、いつまでたってもコピーが終わらないのだ。画面はコピー中の表示のまま、固まっている。

(まさか、ポートが閉じられた？)

進弥は隣のパソコンを操作し、接続中のサーバに自作ツールでポートスキャンをかける。その結果、さっきまで開いていたポートが閉じられている事が判明した。

「やべっ！ ばれた?!」

焦って接続を解除しようとする、画面の真ん中にメッセージウインドウが現れた。

『シンヤ、不正アクセスは犯罪行為です』

メッセージを見つめて、進弥の動きが止まった。

(どうして、オレがシンヤだって分かった?)

ウインドウが閉じられ、新たなウインドウが現れた。

『あなたと、こんな形で再会したくはなかった』

「再会……?」

記憶を遡る進弥の脳裏に、かつて見たチャット画面と幼い妄想が蘇る。

寒い部屋に閉じ込められている深窓の令嬢。友達のいない彼女は、唯一外部との接触が図れるパソコンで、シンヤとの会話を求めた。彼女の慰めになるならと、不正アクセスと知りながら、シンヤはチャットを繰り返していた。

「ハルコなのか?」

進弥の呼びかけが聞こえるはずもなく、再び新たなウィンドウが開いた。

『昔馴染みのよしみで警告します。セキュリティ会社に通報しました。三十分以内に警備員が駆けつけるでしょう』

ウィンドウが閉じられ、通信が途絶える。呆然と画面を見つめた後、進弥は頭の天辺から声を上げた。

「はあ?!」

慌てて終了処理もそこそこに、二台のパソコンの電源を落とす。

「ちくしょーっ! ハルコの奴! 何が昔馴染みだ! 中途半端に人間くさくなりやがって!」

わめきながら荷物をまとめると、進弥は部屋を飛び出した。

いくつもの無関係なサーバを経由して、目当てのサーバに侵入している。人間なら短時間でそう簡単に居場所まで特定できるとは思えないが、相手は自律思考エンジン搭載のスーパーコンピュータだ。ハツタリではないだろう。

元よりコンピュータに嘘やハツタリなどあろうはずがない。

怪訝な表情をするフロントに宿泊費を突きつけて、進弥は夕方ち

エックインしたばかりのホテルを後にした。

なるべくホテルから遠ざかるように、進弥は当てもなく街をさまよい歩いた。しばらくして充分ホテルから離れた路上で荷物を置くと、大きくため息をついてその場にしゃがみ込む。

セキュリティ会社は警察ではないので、それほど深追いはしてこないと思うが、実家へは戻らない方がいいだろう。

今夜これからどうしようと考えていると、頭の上で声がした。

「そこ、どいてくれる？」

顔を上げると、小さな女の子が無表情に見下ろしていた。

なんの事か分からず、進弥がぼんやり見つめ返すと、彼女は手にしたカードをヒラヒラと振りながら、苛々したように言う。

「邪魔なんだけど」

ふと振り返ると、進弥の後ろにはタバコの自動販売機があった。

「ああ、ごめん」

進弥は立ち上がり、彼女を見下ろす。頭が進弥の胸辺りまでしかない。随分と小さい女の子だ。

進弥の視線に気付いて、彼女は目一杯首を上向けて睨む。

「何？」

「タバコ買うの？」

進弥が問いかけると、彼女は思いきり不愉快そうに言う。

「悪い？」

「悪くはないけど、買えないと思うよ」

「未成年じゃないよ。このカード、私のだし。見た感じ、おまえの方がずっと年下だと思う」

彼女の突き出したカードには、彼女の顔写真が印刷されていた。タスポを持っているという事は、間違いなく成人らしい。

小柄で丸顔の彼女は、確かに随分若く見える。彼女はそれを不愉快

快に思っているのだろう。

進弥はクスリと笑うと、指摘する。

「そうじゃなくて、時間。もう自動販売機は停止してるよ」

彼女は驚いたように目を見張る。

「え？ 今何時？」

「もうすぐ十二時」

進弥が腕時計を見て答えると、彼女はガックリと肩を落とした。

「しまったー。夕方から昼寝してたから時間が分からなくなった」

（それは昼寝とは言わないんじゃない？）

進弥は思わず苦笑する。

彼女はおもむろに顔を上げて、財布から取り出した一万円札を進弥に突きつけた。

「お願い。そのコンビニで買ってきて」

「へ？ 自分で行けばいいじゃん」

「年齢確認とかされるの、うざいから。銘柄はコレね。三つばかり買ってきて」

彼女は自動販売機に並ぶタバコを指差し、有無も言わず進弥をせき立てる。

進弥は諦めて、ひとつため息をついた。

「わかったよ」

彼女は笑顔で手を振りながら追加注文する。

「ついでにビールも買ってきて。発泡酒じゃなくてビールね」

「はいはい」

彼女に背を向けコンビニに向かおうとして、進弥は足を止めた。

ふと思いついて彼女を振り返る。

「ねえ、お遣いの対価として、ひとつお願いがあるんだけど」

「何？」

「今夜、マズミさんの家に泊めてくれない？」

彼女は訝しげに眉を寄せる。

「なんで私の名前知ってるの？」

「タスポに書いてあるよ」

「あ、そっか。いいよ」

「ええ?!」

あまりにあっさり承諾されて、進弥の方がうろたえた。

「本当にいいの？ 素性の分からない男を。あ、家族と同居とか？」

「ひとりだけど」

「だったらなんで？」

「自分から言っというて、何慌ててんの？ それともおまえは、初対面の女を会ったその日に襲うような野獣なの？」

「いや、そこまで無節操じゃないけど」

「じゃあ、問題ないじゃん。家は無駄に広いから、ドキドキして眠れないなんて事はないから安心して」

「うん……」

「じゃあ、買い物よろしく」

彼女は笑顔で、進弥の背中を叩いた。

とりあえず今夜の寝床は確保できたものの、なんだか釈然としな
いものを感じながら、進弥はコンビニに足を向けた。

絶対、猫が好き！ (2)

路上に放置された荷物の側で、真純ますみは青年の帰りを待った。

大きめのショルダーバッグと、パソコンが入っているらしいブリーフケース。荷物は出張中のビジネスマンのようだ。しかし彼の服装は、そうは見えない。

ジーンズにスニーカー、Tシャツの上に半袖シャツを羽織っている。ビジネスマンだとすると、休日出勤中といったところだろうか。だが、今日は休日ではない。

見た目は二十代前半。しかし学生には見えない。

今夜寝るところがない、というのも気になる。でも犯罪者のような危険な香りもしない。

彼がどういふ奴なのか興味が湧いて、家に泊める事を了承してしまった。

彼は焦っていたが、お世辞にも女らしいとは思えない自分が相手では、そういう危険も皆無と言っていいだろうと、真純は確信していた。

少しして彼がコンビニから帰ってきた。

釣り銭とレジ袋を渡され、真純は早速袋の中を覗く。中に入っていたビールを見て、思わず声が弾んだ。

「あ、私の好きな銘柄、よくわかったね」

「え？ 自分で指定したじゃん」

「違うよ。ビールの方」

「ああ。それ、僕も好きだから」

「ふーん。おまえとは気が合いそうだね。帰ったら一緒に飲もうよ」
「うん。ありがとう」

彼は戸惑うような表情で、少しだけ笑って見せた。

「じゃ、行こうか」

声をかけて促すと、彼は荷物を持って、半歩後ろからついてくる。少し探りを入れてみる事にした。

「おまえ、ホームレス？」

「いや、違うけど」

「だよね。あの人たち特有の無気力感とか気怠さとかないし。どっちかっていうと、置き去りにされて途方に暮れてる子犬って感じ？」

振り返って見つめると、彼は苦笑しながら曖昧に答える。

「まあ、そんなとこかな。といっても捨てられたわけじゃないけど」
年を訊いたら二十歳だという。自分よりもかなり年下だとは思っていたが、八つも下だった。学生ではないらしい。フリーのプログラマだと言うが、詳しくは語らない。

真純は在宅で、辺奈商事のデータ入力を行っている。

真純もそうだが、コンピュータシステムに関わる仕事をしていると、その企業の内部情報や顧客の個人情報を目にする事が多い。

そのため仕事上知り得た情報を外部に漏らさないように、守秘義務が課せられるのだ。彼が多くを語らないのはそのためだろう。

だが、なぜ今夜寝るところがないのかは、依然として謎のままだ。しばらく話しながら歩いていると、彼がためらいがちに声をかけた。

「ねえ。マスミさん」

「何？」

「あの……いくら年上とはいえ、女の子におまえ呼ばわりされるのは、ちょっと抵抗あるんだけど」

「ああ、そっか。名前聞いてなかった。なんて呼べばいいの？ 私
すとうますみ
は須藤真純」

彼は少し逡巡した後、ニッコリ笑って答えた。

「好きな名前で呼んでいいよ」

「はあ？」

面食らって立ち止まった真純に、彼は尚も言う。

「拾った子犬に名前をつけてよ」

名乗れない理由でもあるのだろうか。頭の中で指名手配になっていそうな事件を思い浮かべてみるが、彼と一致しそうなものを思い付かない。

分からないので訊いてみる。

「なんで名乗らないの？」

「自分の名前、あまり好きじゃないんだ。だからつけて」

今ひとつ納得しないが、真純は渋々引き下がる。

「何でもいいの？」

「ポチとかマイケルとかは勘弁。日本人男子っぽいのにしてね」

拾った子犬だからポチにしてやろうと思ったのに、見透かされてしまったようだ。

イケメン俳優の名前にして、いちいちフルネームで呼んでやろうかとも思ったが、それは自分自身も気恥ずかしいので、適当につけてやる事にした。

「じゃあ、シンヤ」

「え？」

彼は一瞬目を見開いた。驚いたような困ったような複雑な表情で、真純に尋ねる。

「なんでシンヤ？ 真純さんの元カレの名前とか？」

「そっちこそ、なんで元カレ限定？」

「だって、今カレがいたら、僕を泊めるわけないでしょ」

「元カレでも今カレでもないよ。真夜中に拾ったからシンヤ（深夜）」

「

真純の説明を聞いて、彼は安心したように声を上げて笑った。

「ああ、そういう事。いいね、それ。シンヤでいいよ」

「元カレでなければいいの？」

「うん。僕、真純さんが気に入っちゃったから、元カレの名前で呼ばれるとしたら、ちょっと複雑だし」

思いも寄らないシンヤの言葉に、真純は思いきり動揺する。

「はあ？ 私の何が気に入ったの？」

シンヤはとびきりの笑顔でキツパリ答えた。

「僕を拾ってくれた、いい人だから」

単純なんだか謎めいているんだか、よく分からない奴だ。真純はあからさまに大きなため息をつく。

「ホント、捨てられた子犬みたいだね。拾った人に懐くなんて」

「懐いてもいいの？」

シンヤは嬉しそうに笑いながら、身を屈めて真純の顔を覗き込む。間近に迫った笑顔に、ちよつとドキリとして真純はクルリと背を向けた。

背の低い真純は、人の顔が至近距離にある事など、滅多にないのだ。それで少し驚いた。

「いい子にしてるならね」

そう言つて真純は再び歩き始めた。後につきながらシンヤは楽しそうに言う。

「吠えないし、咬まないし、御主人様には絶対服従。躰の行き届きたい子だよ」

「本当に絶対服従？」

からかうような調子で言いながら、真純は振り返る。目が合うとシンヤは視線を外して、目を泳がせた。

「えーと、大筋では」

困惑したように言い淀む様がおかしくて、真純はクスクス笑った。

「心配しなくても無茶な命令はしないよ。私は”いい人”なんだし」

「そうだね」

シンヤは苦笑を返した。

家にたどり着くと、庭付き一戸建ての大きな二階屋を見上げて、シンヤは呆然とつぶやいた。

「ここに一人で住んでるの？ 真純さんって社長令嬢かなんか？」

「それは私の友達。ここはその子の家なの」

真純の友人、辺奈瑞希は、辺奈商事の会長の娘だ。元々この家に住んでいたが、仕事が忙しくなり、会社からは少し距離のあるこの家に帰るのが億劫になったらしい。

そして、ついには会社の近くにマンションを買って、住むようになったのだ。人が住まないと家が傷むからという理由で、真純が管理がてら格安で住まわせてもらっている。

門を開け玄関を入ると、シンヤを中に促す。靴を脱いで廊下を抜け、リビングにやってきたシンヤは、部屋を眺めながら改めて感嘆の声を漏らした。

「広っ……」

「まあ、一人で住むには無駄に広いから、掃除が大変なんだけどね」
いっそももない方が掃除は楽なのだろうが、家具類は元々瑞希が使っていたものが、そのまま置いてある。

リビングにも立派なソファの四点セットが置かれていたり、壁には何十型なんだか真純には判別できない、巨大な液晶テレビが埋め込まれたりしていた。

真純はレジ袋をローテーブルに置いてソファに腰を下ろし、入口で立ち尽くしているシンヤを手招いた。

「こっち来て座れば？ 一緒に飲もうよ」

「あ、うん」

シンヤは入口の壁際に荷物を置いてやって来ると、隣に座った。

真純の渡した缶ビールを受け取りながら、シンヤがおずおずと提案する。

「僕、掃除係になろうか？」

缶を開けようとした手を止めて、真純はシンヤを真っ直ぐ見つめた。

「それって、今夜一晩じゃなくて、もうしばらくここにいてるって事？」

「うん。そうさせてくれると、ありがたいんだけど」

シンヤは頭をかきながら、遠慮がちに笑う。真純も笑顔返す。

「いいよ。掃除してもらおうと私も助かるし」

「本当？　ありがとう」

シンヤは満面の笑顔を見せた。

なぜ承諾したのが、自分でも分からない。名前も教えてくれない、本人曰く、素性も分からない男なのに。

もう少しだけ、この謎めいた子犬がどういう奴なのか、知りたいという好奇心なのかもしれない。

何より、この子犬の笑顔には、抗いがたい魔力があった。

「じゃ、同居を祝して乾杯！」

真純は笑顔で、シンヤと缶ビールの縁を合わせた。

絶対、猫が好き！ (3)

翌朝、真純は苛々しながら階段を上った。先ほどから何度も呼んでいるのに、シンヤが部屋から出て来ないからだ。

確かにゆうべは寝たのが、深夜二時になろうとしている時間だった。

二十歳という年齢のため場数を踏んでいないというのもあるだろうが、シンヤは真純ほど酒に強くないようだ。缶ビール二本目で、ほろ酔い状態になっていた。

そのせいで眠いのは分からなくもないが、さっさと起きてもらわないと、真純自身の予定にも支障を来す。

元々コンピュータ業界で働く者は、夜型人間が多い。シンヤもそうかもしれない。

真純は以前、辺奈商事に内勤で勤めていた。

当時は情報システム部でデータ入力を行っていたが、九時の始業時間に出社している者は、瑞希以外に夜勤明けの技師やシステムオペレータと協力会社の数名だけだ。

主任やチームリーダーでさえ、きちんと出社しない事が多い。

そういう立場の人は、日中、出張や取引先との電話応対などで自分の仕事ができないため、誰にも邪魔されにくい深夜に仕事をする。そのため、翌日出社が遅くなるのだ。

理屈は分かるが、真純に指示を与える人間までそれをやられると、その人が出社するまで真純はぼんやり待っていないなければならない。

瑞希が前日に指示を与えるように注意したが、それでも急ぎの出張や会議で前日いなかったりして、何度か朝のぼんやりタイムを味わうハメになった。

リーダーたちがそんな状態なので、部下たちもそれに合わせて遅

くやって来たりする。

いくら前日に残業しても翌日遅く来たのでは、作業の進捗にはプラスにならない。真純と違い、彼らにはスケジュールがある。リーダーがいなくても、できる仕事はあるはずだ。

瑞希も早めに帰るように言っているらしいが、あまり効果はないという。

納期に間に合わなければ困るので残業するなどは言えないし、過労で倒れられても困るので朝早く来いと強くも言えないらしい。

だが端から見ている真純には、大半はただのルーズにしか見えない。

自分の仕事も滞るし、見ていて苛々するので、指示は瑞希から直接受ける事として、在宅勤務にしてもらった。

真純も決して朝が得意なわけではない。在宅勤務で時間が自由に使えるとなると、生活リズムが乱れる事は容易に想像がつく。

なるべく不規則にならないように、決まったタイムスケジュールで生活するように心がけているのだ。

それを今、シンヤが乱そうとしている。

二階にあるゲストルームのひとつを、シンヤに使ってもらう事にした。瑞希が住んでいた頃、泊まりがけで遊びに来た時、真純が使っていた部屋だ。

部屋には元々、シングルベッドと机、クローゼットが備え付けられているので、バストイレのないホテルの部屋のようなだった。

部屋の前で扉をノックしながら名前を呼んだが、やはり返事はない。

真純は扉を開けて、部屋の中に入った。カーテンの引かれた薄暗い部屋の中、案の定シンヤはベッドの上で眠っている。

人が入ってきた事にも気付かず寝ているようでは、この子犬は番犬にはならないと呆れる。

真純はツカツカとベッドの側まで歩み寄り両ひざを付いて座ると、シンヤの耳元に顔を近付け大声で叫んだ。

「起きろ！」

さすがにシンヤもビクリと身体を震わせ、一気に目を見開く。しかしすぐに、不愉快そうに顔をしかめながら「うーん」と唸って目を閉じた。

真純はもう一度わめく。

「寝るな、起きろ！」

するとシンヤは、長い腕を伸ばして、真純の背中に回し、自分の方に引き寄せた。

「わっ……！」

バランスを崩した真純は、慌ててベッドに両手をつく。危うくシンヤの上に倒れ込むところだった。

目の前のシンヤが、目を閉じたまま、不機嫌そうにつぶやく。

「やだ。まだ眠い」

そしてシンヤは、更に真純を引き寄せようとする。カッとなった真純は、シンヤの額に頭突きを食らわせた。

「ねぼけるな！」

シンヤは真純から手を離し、額を押さえて反対向きに転がった。

「いってえ……。懷いていいって言ったくせに……」

言い草から察すると、ねぼけていたわけではないようだ。

真純は立ち上がると、シンヤを冷ややかに見下ろす。

「いい子にしてたらって言ったでしょ？」

「僕、何かした？」

「今、私の邪魔してる。さっさと起きて、ごはん食べてくれないと、片付かないから私の予定が狂うの」

「はあい」

シンヤは返事をしながら、のろのろと身体を起こして、まだ痛そうに額を撫でた。

真純はベッドを離れ、窓へ向かいながら、こっそり額を撫でる。自分自身もちょっと痛かった。

カーテンを全開にして戻ってくると、シンヤはベッドの縁に座っ

てぼんやりしていた。動こうとしないシンヤに軽く苛ついて、真純は声を荒げる。

「ボーツとしないで、さっさと動く！」

「僕、朝苦手なんだよ。ゆうべ遅かったし」

「私も得意なわけじゃないよ。甘えんな。明日から七時半に起床確認が取れない場合は、朝食抜きだからね」

「七時半?! そんな早朝に起きた事ないし」

全然、早朝ではない。大げさに驚くシンヤに、どういうただれた生活をしているんだと呆れる。

今頃になって、ふと気付いたように、シンヤが尋ねた。

「あれ? そういえば朝ご飯があるの?」

「あるよ。だからさっさと食べて。片付かないから」

「真純さんが作ったの?」

「他に誰が作るの」

途端にシンヤは嬉しそうな笑顔になった。

「僕のため? 感激しちゃうな」

「別に。おまえの分はついでだから、感激しなくていい。今後も家で食べるなら食費は入れてもらうし」

「食べる食べる。いつも外食かコンビニだから、ちゃんとしてものが食べられるの嬉しい」

自炊した方が絶対安上がりなのに、ひとり暮らしの男とはそういうものかと納得する。

十分以内に来なければ片付けると最後通告をして、真純は階下へ引き上げた。

朝食を終えて片付けを済ませると、真純はシンヤに掃除道具の場所を教え、急いで家を出た。

家を出た真純は、辺奈商事へ向かう。入力済みの書類と、これから入力する書類を交換するためだ。

それに、一人で住むのが寂しいなら友達と一緒に住んでも、動物を飼ってもいいと言われていたが、一応大家である瑞希にシンヤと

の同居を報告する必要があるだろう。

辺奈商事本社ビルの二階にあるカフェに入ると、すでに瑞希が待っていた。真純の姿を認めると、軽く手を振る。

真純はコーヒーを注文し、それを持って瑞希の元へ向かった。

「ごめん。子犬にエサをやったら遅くなっちゃった」

真純が言い訳をしながら向かいの椅子に座ると、瑞希が興味深そうに尋ねた。

「あら、犬を飼い始めたの？」

「うん。ゆうべ拾ったの。といっても人間の男なんだけど」

「男?!」

驚いて大声を上げる瑞希を、真純は慌てて制する。

「声でかいよ」

「だって、あんたと男って結びつかないんだもん」

「だから、そういうんじゃないって」

真純はシンヤとの経緯を、瑞希に話した。話を聞き終わった瑞希は、眉をひそめて真純に言う。

「大丈夫なの？ そんな名前も教えてくれないような奴」

「今のところ問題ないよ。朝、なかなか起きない事以外は。それで今日遅れたの」

頬を膨らませる真純に、瑞希はクスリと笑う。

「あんた朝寝坊な奴、嫌いだもんね」

「だって、甘えてるだけじゃん。上が百を切ってる低血圧の私が起きられるのに」

「あんたの低血圧が変わってるのよ」

変わってるわけじゃない。かなり努力して起きているのだ。

「ねえ、シンヤと同居してもいい？」

「まあ、あんたがいいなら、かまわないわよ。貴重品と、うちの書類やデータの管理はしっかりしてね」

ため息と共に承諾した後、瑞希は懐かしそうに目を細めた。

「それにしても、シンヤくんか……。懐かしい名前だわね」

「何？ 瑞希の昔の男？」

真純が尋ねると、瑞希はイタズラっぽく笑った。

「違うわよ。ハルコの初恋の彼」

「はぁ？ ハルコってコンピュータの？」

真純は訝しげに眉を寄せる。瑞希はお構いなしにクスクス笑った。
「本名かどうかは不明なんだけど、三年くらい前だったかな？ チヤットで知り合ったのよ」

そして瑞希は、ハルコの初恋について話してくれた。

「あの時高校生だって言ってたから、それが嘘じゃなかったら、あんたのこの子犬ちゃんと同じくらいに成長してるわね」

「でもシンヤは私がつけた名前だよ？」

「別に同一人物だとは思わないけど、ちょっと思い出したのよ」

そう言って少し微笑むと、瑞希は席を立った。

「そろそろ仕事に戻らなきゃ。最近ハルコの機嫌が悪いから余計な仕事が増えるのよ」

瑞希特有の擬人化表現だろうが、恋をしたり不機嫌になったり、おもしろいコンピュータだ。

苦笑する真純に手を振って、瑞希はカフェを出て行った。

瑞希と別れた真純は、書類を持って家に帰る。

リビングを覗くとシンヤの姿はなかった。掃除道具は片付けられている。声をかけて部屋を覗いたが、そこにもシンヤはいなかった。合鍵は渡してある。鍵がかけられていたという事は、どこかに出かけたのかもしれない。

さして疑問にも思わず、真純は書類を持って仕事部屋に入った。

絶対、猫が好き！ (4)

夕方になっても、夜になってもシンヤは帰ってこなかった。荷物は部屋に置いたまま。出て行ったわけではないらしい。

真純は苛々しながら、何度もリビング前のテラスに出ては、タバコを吸いながら外を窺った。

とうとう真夜中になったが、それでもシンヤは帰らない。

家で食事を摂ると言ったシンヤのために、用意した夕食はすっかり冷め切ってしまった。

それも苛々の原因だが、携帯電話の番号もメールアドレスも教えてあるのに、連絡のひとつも寄越さない、いい加減さに苛ついた。

だが時間が経つにつれて、心配にもなってきた。もしかして連絡のできない状態にあるのではないだろうか。事故に遭って、病院に担ぎ込まれているとか。

苛立ちと心配を抱えたまま、真純はリビングのソファに寝転んで、見るともなしに深夜番組のチャンネルをパラパラ替えたり、本をパラパラめくったりした。

しばらくそうしていると、玄関のチャイムがけたたましく鳴った。こんな真夜中に来客などあろうはずがない。

真純は足音も荒く玄関へ向かう。一応、覗き穴から外を確認すると、はたしてそこにはシンヤの姿があった。

扉を開けると上機嫌のシンヤが、全く悪びれた様子もなく、笑顔で軽く手を挙げる。

「ただいま」

どうやら、かなり酔っているらしい。その様子に、少しでも心配したのがバカバカしく思えて、真純は怒鳴りつけた。

「鍵、渡してあるでしょ?! 自分で開けたら? まさか無くした

んじゃないよね?!」

「んー。そうだったね。あるよ。ほら」

シンヤはポケットからキーホルダーを引っ張り出して、顔の横でチャラチャラ振って見せた。

「でも、真夜中にそんな大声出したら、近所迷惑だよ」

連絡も寄越さず深夜に帰宅するという、同居の礼儀を欠いた事をしておきながら、モラルをとにかく言うシンヤに益々ムカついて、真純は更に声を荒げた。

「だったら、そんなところに突っ立っていないで、さっさと入って扉を閉めて!」

「はいはい」

小馬鹿にしたような返事にカチンと来たが、とりあえず家に入る。廊下の途中で振り返り、腰に手を当てて睨み上げると、後ろからついてきていたシンヤが、不思議そうな表情を浮かべてその場に立ち止まった。

「こんな時間まで何してたの?」

努めて静かに問い質す。シンヤは少し気まずそうに答えた。

「……クライアントに呼び出されて打ち合わせ。それが長引いちやって、その後飲みに行ってた。交渉は決裂したけど」

決裂? 契約単価で折り合いが付かなかったとか? 決裂したのに一緒に飲みに行ったの? 今回はダメだったけど、また次の機会にはよろしくって事だろうか。

なんとなく腑に落ちないが、そんな事は真純にとって、どうでもよかった。

「連絡くらいできるでしょ?」

「ごめんね。うっかりしてた」

(うっかりかよ……)

半日、人の心を乱しておいて、その原因が「うっかり」とは――。言いたくはないが、近頃の若いもんは、と言いたくなる。

真純は大きいため息について俯く。ついつい恨み言が口について

出た。

「バカみたい。心配して損した」

するとシンヤは嬉しそうな声を上げて、真純に縋り付いてきた。

「心配かけてごめんね。でも超嬉しい」

「懐くな！ おまえ酒臭いし」

抵抗して引き剥がそうとしても、長い腕がしっかりと絡みついてビクともしない。

「真純さんはタバコ臭いよ」

「イヤなら離れたら？」

自分で引き剥がせないの、シンヤの方から離れてもらおうと、冷ややかに言い放つ。けれどシンヤは、離れるどころか益々きつく抱きしめ、頬をすり寄せてきた。

「やだ。タバコ臭いのはイヤだけど、真純さん抱き心地いいんだもん。ほっぺも柔らかくて気持ちいい」

「だから、懐くな！」

シンヤの過剰なスキンシップに、次第に鼓動が早くなる。そんな真純の胸中をよそに、シンヤは耳元で囁くように言った。

「僕、絶対に真純さんを裏切らないから。だからペットじゃなくて番犬になるよ」

「人が来ても気付かずに寝てるような奴に、番犬が務まるか」

真純が吐き捨てるように言うと、シンヤは肩を揺らしてクスクス笑った。

「違うよ。僕が守るのは家じゃなくて真純さんだよ」

シンヤはようやく身体を離し、少し身を屈めて首を傾げながら、真純を正面から見つめた。

「ねえ、キスしていい？」

「へ？」

突然の番犬志願から、なぜいきなりキス？ 酔っぱらいの戯言たわごとにしても、あまりに脈絡がなさ過ぎる。

酔っぱらいの戯言だと分かっている、気が動転して思考が真っ

白になり言葉が出て来ない。

「あ……その……それは……」

真純は反射的に一步下がり、近づくシンヤを制するために片手を伸ばした。その手首を掴まれ、逃げるに逃げられなくなる。

シンヤはもう片方の手も捕まえて、身を退こうとする真純をその場に繋ぎ止めた。そしてゆっくり身体を倒す。

近付いて来るシンヤの顔に、真純の鼓動がピークに達した時、シンヤの頭は目の前を素通りし、捕まえた手の甲に口づけを落とした。肩すかしを食らったようで真純が呆氣にとられていると、シンヤは顔を上げ目の前で微笑んだ。

「御主人様に忠誠の証」

言葉を失う真純を見つめて、シンヤは意地悪な笑みを浮かべる。

「もしかして、唇だと思ってた？」

真純はハツとして、思い切り首をブンブンと横に振った。

「思っていない思っていない！」

本当は思っていた。そもそもキスと言われれば、そう思うのが普通だろう。

シンヤは手首を掴んだまま、もう片方の手を離し、その手を真純の頬に添えた。まじまじと顔を覗き込んで、からかうように言う。

「顔、赤いよ。照れてる？　僕が犬なら、真純さんは猫だよね。本当は優しいのに、気まぐれで素っ気なくて、素直じゃないっていうか」

「うるさい！」

真純の罵声を無視して、シンヤは顔を上向かせると、グッと顔を近付けてきた。

「じゃあ、御主人様のご要望にお応えして——」

「要望なんてしてないし！」

焦って突き放そうとするが、酔っぱらいのくせにビクともしない。わめく真純の唇に、シンヤは頬に添えた手の親指を当てて、言葉を制した。

「黙って」

目の前で囁かれ、唇に息がかかる。無意識に身体がピクリと震え、急激に鼓動は早くなる。

とても正視に耐えられず、真純はギュッと目を閉じた。

その直後、唇を何かがかすめ、シンヤの頭が肩の上に乗った。その重さに驚いて、真純は咄嗟に目を開く。

頬に添えられた手が、だらりと垂れ下がった。それと同時にシンヤの全体重が、真純の上にのしかかる。完全に身体中の力が抜けている。

「うわっ……！ 重っ……」

とてもシンヤの体重を支えられるわけもなく、真純は崩れるようにシンヤの下敷きになって廊下に倒れた。

「信じられない！ この酔っぱらい！」

苦勞してシンヤの下から這い出した真純は、頭の上から思い切り怒鳴る。

それが全く聞こえていない様子で、シンヤは目を閉じたまま微動だにしない。

目を閉じた途端、睡魔に襲われたのだろうか。それにしても、こんなに突然、電池が切れたように眠ってしまうとは、想像もしなかった。

おまけに全身の力が抜けているくせに、どういうわけか手首を掴んだ手だけは緩めない。そのせいで身体の下から抜け出すのに苦勞したのだ。

手首を掴んだ手をほどこうとして、ふとシンヤの寝顔が目に入る。真純は手首をそのままに、空いた手で何気なくシンヤの頭を撫でた。このまま元いた場所に捨てに行こうか、とすら思う。けれど自分ひとりでは、この大きな子犬を運べないので、仕方なく断念したのだ。

年齢のギャップか、性格の不一致か、苛立つ事が多いのに、なぜか憎めない。見放してしまえない。

「こんなところで寝たら、身体中痛くなるよ」

身体を揺すってみたが、電池切れのシンヤは動かない。

無理矢理たたき起こすしかないかと考えながら、シンヤの寝顔を見つめる。唇に目が止まりドキリとした。先ほどの事が思い出されて、顔が熱くなる。

さっき唇をかすめたのは、シンヤの唇だったのだろうか。

ただ、かすめただけなのに、唇かどうかも分からないのに、胸の鼓動が収まらない。

やはり苛つく奴だ。こんなに人の心を乱しておいて、自分だけ幸せそうに眠ってしまうなんて。

真純はシンヤを見下ろして、その頭をコツンと小突いた。

絶対、猫が好き！ (5)

鍋の底を木べらでガンガン打ち鳴らしながら、真純はシンヤの部屋に入った。呼んだくらいでは起きない事を、昨日の朝学習したからだ。

さすがにシンヤも目を覚ましたらしく、唸りながら頭を抱えて身を縮めた。

布団から出ようとしなないシンヤに、真純はベッドの側まで歩み寄り、頭の上でもう一発鍋を叩く。

シンヤは頭を抱えたまま、か細い声で懇願した。

「わかったから……やめて。頭痛いし、気持ち悪いんだ……」

「二日酔いだよ、それ。弱いくせにバカ飲みしたんでしょ」

シンヤはのろのろと身体を起こし、俯いたまま片手で顔を覆った。

「正直、あんま覚えてない……。どうやって帰ってきたのか……。どうやって布団に入ったのか……」

「何？ 記憶も飛んでるの？」

真純は驚いて目を見張る。とても、そこまで泥酔しているようには見えなかった。

足取りは多少フラついていたものの、顔色も変わってなかったし、はつきりとしやべっていた。眠り込んだ後、たたき起こしたら、自分で階段を上がり部屋に入ったのだ。

「うーん。断片的には覚えてる。真純さんに怒鳴られた事とか、番犬になるって言った事とか……」

ゆうべの記憶が蘇り、ドクリと鼓動が跳ねる。少しドキドキしながら尋ねた。

「その先は？」

「……全然。だから、どうやって寝たのかわからない」

少しホッとしたと同時に、記憶のない酔っぱらいに翻弄されてい

たのかと思うと、無性に苛つく。

真純は顔をしかめてシンヤを睨んだ。

「おまえ、酒ぐせ悪すぎ」

途端にシンヤは顔を上げてうろたえた。

「ええ?! 僕、何か変な事したの?!」

「した。抱きついて離れないし、キスしようとするし。相手によってはセクハラで訴えられるよ」

「マジ?! 全然覚えてない!」

あまりに悲愴な面持ちがおかしくて、ちょっとだけ気が済んだ。どうせ、もうしばらくは何も食べられないだろう。

「朝ご飯はいらないでしょ? 何か飲むなら下りてくれば?」

そう言って背を向けた時、いきなり腕を強く掴まれた。咄嗟の事に驚いて、真純は手にした鍋を取り落とす。

「な、何?」

振り向くとシンヤは、真顔で見つめていた。正面から視線がぶつかり、ドキリとする。

「改めて、キスしていい?」

まだ酔っているのだろうか。

いや、確かに二日酔いっぽいけど、意識ははっきりしていると思うが――。

何が「改めて」なのか、よく分からない。

真純は苦笑に顔を引きつらせて問い返す。

「意味、わかんないんだけど?」

「だって、覚えてないの悔しいもん。だから意識のある状態で、ちゃんとキスしたい」

どうやらキスしたと勘違いしているらしい。

「勝手に都合よく話をねじ曲げないで。しようとしただけで、してないから」

かすめたかもしれない事は黙っておく。

シンヤは呆けたようにホッと息をつく。

「あ、そうなんだ」

そしてニツコリ笑って、掴んだ腕を引き寄せた。真純は抗う間もなく、シンヤの腕の中に捕らえられる。

「じゃあ、やっぱり、ちゃんとキスしたい」

「だから！ 別にしないでいいから！」

抵抗すればするほど、シンヤはきつく抱きしめる。

「でも、したいからする。僕、真純さんが好きだし」

そんな、ついでのようにサラリと言われても、信用できない。

間近に迫った吐息から逃れるように、顔を背けて真純はわめいた。

「私の気持ちはどうなの？！」

シンヤはピタリと動きを止める。恐る恐るその顔に視線を向ける。目が合うと、シンヤはイタズラっぽく笑った。

「知ってるよ。僕の事、好きだよね？」

「う……」

何を根拠にそう決めつけているのか分からない。自分で言っておきながら自分の気持ちが分からず、真純は絶句する。

嫌いではないと思う。けれど好きかと問われれば、どうなのか分からない。

確かに抱きしめられるとドキドキする。現に今もドキドキしている。だからといって、これが恋愛感情によるものだとは限らないと思う。

自信満々に人の気持ちを決めつけるシンヤに苛つく。

真純は木べらを持った手をシンヤの背中に回し、手首を返して後頭部をパコンと叩いた。

「自惚れるな」

「いてっ！」

シンヤは腕をほどき、両手で後頭部を抱えるようにして俯いた。

「マジいてえ。頭痛が三割り増しになった」

「自業自得」

いいながら真純は、拾った鍋を木べらでガンガンかき鳴らす。シ

ンヤはたまらないといった表情で、両手で耳を塞ぎ、顔をしかめた。
「お願い……それ、やめて」

真純は手を止める。シンヤは両手を下ろし、安心したように大きく息を吐いた。

「鍋叩いて起こすって、マンガとかでは見た事あるけど、本当にやる人初めて見た」

「呼んでも起きない、おまえのせいだよ」

ムツとして言い返すと、シンヤは唇に人差し指を当て、上目遣いに見つめて言う。

「キスで起こしてくれたら、一発で起きるよ」

「ふざけるな。新婚夫婦じゃあるまいし」

「ちえーっ。いいじゃん。キスくらい」

ふてくされたようなシンヤの声を背に、真純は部屋を出た。階段を下りながら、最後の言葉が引っかかる。

「キスくらい」

シンヤにとってキスは、その程度の重みなのだ。

自分の頭が固すぎるのかもしれないが、ドキドキした事が虚しく思えてきた。

絶対、猫が好き！ (6)

朝食と後片付けを済ませ、ペットボトルの水を飲んでいると、シンヤがダイニングにやってきた。

真純の飲んでいるペットボトルを、物欲しそうに見つめているので差し出す。

「飲む？」

「え？ いいの？」

なぜかシンヤは差し出されたペットボトルを、戸惑いがちに見つめる。

「いいよ。水くらい遠慮しなくても」

「でも間接キスになっちゃうよ？」

シンヤの言葉に、真純は思いきり脱力する。

「何、それ。中学生じゃあるまいし。飲み会とかで、みんなで回し飲みすること、普通にあるでしょ」

「だって、さっき嫌がってたから、間接でもイヤかと思って。真純さんがかまわないなら、僕は全然平気だよ」

そう言ってペットボトルを受け取ると、シンヤはイタズラっぽい表情で、ペットボトルの口をペロリと舐めた。

真純は大きくため息をついて目を伏せる。

「わざわざ舐めなくていい」

「なんだ、やっぱ気にしてんじゃん」

「おまえが変なこと言うからだよ」

シンヤの横腹を小突いて部屋を出ようとする、後ろから声をかけられた。

「ねえ、頭痛薬ない？」

真純は振り返る。

「二日酔いには効かないと思うよ。それ飲んで、トイレ行って、少し寝てたら治るよ」

「了解」

軽く手を挙げて、シンヤは水をグビグビと飲み始めた。彼が再び寝てしまう前に、告げておくことにする。

「私、もう少ししたら出かけるから」

「え？ 今日も？」

「っていうか、ほぼ毎日。今日は掃除しなくてもいいけど、体調が快復したらしてくれとありがたいけど」

「うん……」

返事をしながら、シンヤは何か言いたそうにしている。

「何？」

真純が促すと、シンヤはおずおずと尋ねた。

「僕も一緒に行っちゃダメ？」

「なんで？」

「なんでって……」

再び言いにくそうに口ごもるシンヤに、真純は思い付いたことを訊いてみた。

「もしかして、辺奈商事の仕事に興味あるの？」

途端にシンヤは、安心したように笑顔になる。

「あ、うん。そう。僕、今仕事してないし」

そういえば、ゆうベクライアントと交渉が決裂したと言っていた。

「そういう事なら瑞希に訊いておいてあげるよ。アポなしでいきなり会うのはマズイでしょ」

「うん……。じゃあ、一緒に行くだけでも。外で待ってるから」

なぜ一緒に来たがるのか意味が分からず、真純はつつい声を荒げる。

「だから、なんで？」

「なんでって……僕、真純さんの番犬だし」

シンヤが何かを隠していることは、なんとなく分かる。元々謎だ

らけの子犬だが、曖昧な笑みを浮かべながら、はぐらかそうとして
いる様に苛つく。

「昼間の通い慣れた道で、そんな必要ないから。酔っぱらいはおと
なしく寝てなさい」

ピシヤリと言い放ち背中を向けると、シンヤは力なくつぶやいた。
「じゃあ、気をつけて。行ってらっしゃい」

シンヤの意味不明な言動は気になるが、真純はひとりで辺奈商事
へ向かった。

いつものカフェで待っていると、少し遅れて瑞希がやって来た。
コーヒーを持って向かいの席に着くと、瑞希は笑顔で軽く尋ねる。
「お待たせ。その後どう？ 子犬ちゃんに襲われたりしてない？」

「え……」

真純が一瞬うろたえたのを瑞希は目ざとく察知して、すかさずツ
ッコミを入れる。

「あら、ホントに襲われたの？」

「ちがっ……！」

慌てて否定する真純を無視して、瑞希はニコニコしながら続けた。
「まあ、よかったんじゃない？ 三十路手前で女になれて。あんた
放つといたら、そのまま妖精になっちゃいそうだったもの」

「何？ 妖精って」

わけのわからない話に思わず食いつくと、瑞希はニッコリ笑って
説明した。

「バージンのまま死んだ女の子は妖精になるって言うじゃない？」
そんな話は初めて聞いた。真純は目を細くして瑞希に問い質す。

「誰が言ってるの？」

「飲み屋のお姉さん」

どうやら一部地域限定のファンタジーらしい。

大きくため息をつく真純を気にも留めず、瑞希は勝手に話を膨らませている。

「でも、うらやましいわね、二十歳の若者なんて。若い子ってテクはなさそうだけど、体力だけは有り余ってそうじゃない？ 実際のところ、どうなの？」

身を乗り出して問いかける瑞希に、真純は眉をひそめて顔を背ける。

「知らないよ、そんな事」

「いいじゃない。教えてくれたって」

黙っていても瑞希の誤解は解けそうもないので、真純はゆうべと今朝の話をした。

話を聞いて瑞希は、ガツカリしたようにため息をついた。

「なあーんだ。実質的には抱きしめられただけなのね。あんた、うろたえすぎよ。いいじゃないキスくらい」

「よくないよ。そんな軽々しく」

「ま、最初からちよつと意外だとは思ったのよね。あんた昭和の女だし」

「瑞希だって昭和じゃん」

「生まれ年のこと言ってんじゃないわよ。学生の頃からそうじゃない。告白されても知らない人だからって断ったり」

確かに昔、そういう事もあった。けれど告白にOKしたら、彼氏彼女として付き合うことになる。

知らない人とその瞬間から、彼氏彼女になるなんておかしいと思う。だから断ったのだ。

黙り込む真純に、瑞希はからかうように言う。

「奥ゆかしいのも過ぎると、本当にフェアリーになっちゃうわよ」
真純はムツとして言い返した。

「別にいいよ。いっそ、これ以上ないってくらい立派なフェアリーになってやる」

「まあーっ開き直っちゃって、かわいくないわね。シンヤくんの事、

嫌いじゃないんでしょ？」

「嫌いじゃないけど、特別に好きなわけでもないし」

「じゃあ、私に紹介してよ」

「へ？」

「謎めいた子犬ちゃんって興味あるわ」

瑞希にシンヤを紹介して、二人が付き合うことになったら、瑞希は度々家にやって来るようになるのだろうか。そして自分の目の前でイチヤイチヤしたりして……。

この二人なら、あり得るような気がする。そうになったら、なんかおもしろくない。

シンヤに出て行ってもらえばいいわけだが、どういうわけか、その選択肢は真純の中から欠落していた。

そんな事を考えていると、出がけにシンヤが言っていた事を思い出した。

「そういえば、シンヤの方が紹介してもらいたがってたよ」

「あら、シンヤくんって年上好きなのか？」

嬉しそうに声を弾ませる瑞希に、真純は意地悪く言う。

「瑞希じゃなくて、辺奈商事の仕事に興味があるんだって。システムの仕事ある？」

途端に瑞希は落胆して、肩を落とした。

「なんだ、そっち？ 優秀な技術者は随時募集中よ。特に最近、ハルコが余計なことばかりしてるから、みんな、やりにくいって仕事に滞ってるのよね」

「ハルコって、まだ機嫌悪いのか？」

真純が問いかけると、瑞希は腕を組んで首を傾げた。

「うーん。よく分からないんだけど、何か捜してるみたいなのよ。とにかくヒマさえあれば、やたら検索してるの。そのついでに作りかけのプログラムソースを覗いたりして、ロジックやコメントの内容にまでケチつけるから、プログラマから苦情が殺到してるのよ」

「それって何かマズイの？」

プログラミングについて、真純はよく分からない。素朴な疑問を口にする、

「まずはないけど、イヤなものよ」と前置きして、瑞希は簡単に説明してくれた。

プログラミング言語にもよるが、人間の書いたプログラムソースは、そのままではコンピュータに理解できない。そのためコンパイラというツールを使って、機械語に翻訳する。

翻訳作業中に翻訳できなかった部分を、コンパイラはエラーメッセージとして人間に知らせてくれる。

だが、コンパイラが教えてくれるエラーは、命令語のスペルが違っていたり、定義が漏れていた、命令語の使い方が間違っていたりという、構文の間違いだけだ。

実際に動かしてみなければ分からないロジックのバグや、ましてやプログラムの動作には何の関係もない、プログラムソースを読みやすくするためのコメント（注釈）の部分についてはエラーを返したりしない。

作りかけのプログラムソースには、その辺の不具合は満載と言ってもいい。それをいちいち指摘されるのは、ありがたい反面、不愉快でもあるという。

おまけにハルコにコンパイルの仕事はやらせていないらしい。

「頭のよすぎるコンピュータってのも考えもんだね」

「別に実害があるわけじゃないから放置してたんだけど、ちょっと苦情がうつつとうしいくらいに増えてきたから、何を搜してるんだか、調べてみようと思うのよ」

ため息と共に、瑞希は席を立った。

いつものように書類を交換し、明日シンヤを引き合わせることを約束して、真純は辺奈商事を後にした。

家に帰って玄関を入った途端、奥からシンヤがものすごい勢いで駆け寄ってきた。

「真純さん、おかえりーっ！」

呆氣にとられて立ち尽くしていると、抱きすくめられた。シンヤはそのまま背筋を伸ばして、軽々と真純を抱え上げる。足が宙に浮いて、逃げられなくなった。

「ちょっと！ 何？」

真純の抗議を無視して、シンヤはギュッと抱きしめると、肩の上で大きく息をついた。

「よかった、無事に帰ってきて」

何を大げさな、と思いながらも、シンヤの心底安心したような声が心地よくて、真純は少し笑いながら返事をした。

「うん。ただいま」

絶対、猫が好き！ (7)

夕食と後片付けを終えた時、携帯電話に瑞希からメールが来た。明日シンヤを連れて行く事になっていたが、ひとりで来て欲しいと言う。

瑞希は課長だ。何か緊急の会議とか来客とか、或いはトラブルでも発生して、時間が取れなくなったのだろう。

用件だけで理由は書かれていなかったもので、詳細は分からなかった。

後片付けを手伝っていたシンヤは、真純がメールを見ている間に、リビングに行っていた。

ソファに座って新聞のテレビ欄を見ていたが、真純の気配に顔を上げて尋ねる。

「テレビ見ていい？」

「いちいち断らなくていいよ」

連絡も超越さず家を空けたり、いくら呼んでも起きないほど、いい加減な奴かと思えば、食事の後片付けを手伝ってくれたり、テレビをつけるのも冷蔵庫を開けるのも、いちいち断るほど律儀だったり、シンヤは二面性を持っている。

もしかして、と思って訊いてみたら、血液型はA B型だった。献血に行くと思はれるので勧めておいた。

真純はシンヤの隣に座って、瑞希の用件を伝える。

途端にシンヤは不安そうな表情を浮かべ、つけようとしていたテレビのリモコンを置いた。

「また、一人で行くの？」

「だって一人で来いって言ってるし、今までも一人だったし」

「でも心配だなあ。やっぱり僕も行くよ」

当たり前のように言うシンヤに、真純は眉をひそめる。

「人の話、聞いてた？ 一人で来いって言われてるの」

「だから外で待ってるよ」

「情報システム部まで来るように言われてるの。多分、書類の交換だけじゃなくて、打ち合わせがあるんだよ。どれだけ時間がかかるか分からないし」

「かまわない。家で心配して待ってるよりいいから」

シンヤが何を心配しているのか、相変わらず分からない。朝もはつきりと言わなかった。

またはぐらかされるかもしれないが、真純はひとつ嘆息して、単刀直入に訊いてみた。

「何を心配してるの？」

「だって真純さん、危なっかしいんだもん。得体が知れない僕をあつさり家に入れたりするし」

自分の事を得体が知れないと自己申告する奴も珍しい。

「だって襲ったりしないって言ったじゃん」

真純が反論すると、シンヤは呆れたように言う。

「そんなの信じる方がどうかしてるよ」

「でも実際に初対面で襲ってないし」

非常識呼ばわりされたのが悔しくて言い返すと、シンヤは意味ありにニヤリと笑った。

「初対面ではね。もう初対面じゃないよ。そうやって油断させて、襲う気満々だったらどうする？」

「え？」

ドキリとして硬直した隙を突いて、シンヤは真純をソファの上に押し倒した。突き放そうとして伸ばした両の手首を掴まれ、ソファに押さえつけられる。

真純の上にのしかかったシンヤは、薄笑いを浮かべて見下ろした。

「真純さん、ちっちゃいからね。押さえ込むの簡単なんだよ」

「放して！ 何のつもり？」

「愚問だね」

必死で抵抗するが、腕も身体もビクともしない。シンヤは何をするでもなく、暴れる真純を静かに見下ろしている。

「逃げられるもんなら、逃げてみなよ」

挑発的なシンヤの言葉に、真純は彼を睨むと、頭を持ち上げて頭突きを食らわそうとした。

しかしシンヤは、それを軽く躲し、再び真純を覗き込む。

「同じ手は二度と食わないよ。次はどうする？」

別におもしろがってるようには見えない。

目を細めて薄笑いを浮かべたまま、感情の見えないシンヤに軽い恐怖を感じて、真純の目には知らず知らずに涙が滲んできた。

それに気付いたのか、シンヤの表情が動いた。申し訳なさそうに穏やかな笑みを浮かべて、手首を掴んだ手を緩める。

「もう少し警戒した方がいいよ。簡単に人を信じない方がいい」

そう言ってシンヤは真純を解放し、身体を起こした。真純も身体を起こして、ソファに座り直す。

気が抜けた途端に、涙が溢れ出した。背中を丸めて俯くと、ひざの上で握った手の甲に、パタパタと涙がこぼれ落ちる。

「真純さん……」

心配そうな声で、シンヤがにじり寄ってきた。伸ばそうとした手を、真純は一喝して制する。

「触らないで！」

一瞬動きを止めたものの、シンヤはお構いなしに横から真純をそっと抱きしめた。

真純の頭に頬を寄せて、囁くように言う。

「ごめんね。脅かし過ぎちゃった。でも本当に心配なんだよ」

結局、何を心配しているのか、はつきりとは分からない。なんだか盛大に、はぐらかされたような気がする。

怖かったはずなのに、すっぽりと包まれたシンヤの腕の中は案外心地よくて、次第に涙が退いていった。

けれど少しも反撃できなかったのは悔しいので、せめて態度で反

撃する。

「おまえが一番危険だという事はわかったから、明日はやっぱり一人で行く。ついて来るな」

「え？ そんなあ」

残念そうに言いながらも、シンヤの声はなんだか嬉しそうだ。

「御主人様の命令じゃ仕方ないな。おとなしく家で”待て”してるよ」

そう言ってシンヤは、一層真純を抱きしめた。

翌日、真純は宣言通り、一人で辺奈商事に向かった。

本社ビルの前で社員証を首にかけ、七階にある情報システム部を目指す。

ショールームや多目的ホール、総合受付のある一階と、エスカレーターで外から直行できる二階のカフェは一般人も出入り自由だが、それ以外の場所では社員証のない者は、守衛に呼び止められるのだ。変則的な勤務をしているものの、真純も一応社員だった。

情報システム部の扉を入ると、入口は狭い空間になっている。一歩入ったところにカウンターが設けられ、受付のプレートと呼び鈴が置いてあるだけで、人はいない。

右手には扉を開け放たれた応接室があり、左手と正面に静脈認証装置の備えられた扉がある。

つまり、静脈を登録した者しか、この先へは入れないのだ。

真純も以前は登録してあったが、今は在宅勤務なので情報が抹消されている。

カウンターの呼び鈴を押すと、少しして正面の扉から、庶務の女性が現れた。真純の用件を聞いて、扉の奥へ姿を消す。ほどなく瑞希がやって来た。

「わざわざ上がってきてもらってごめんね。下じゃちょっと話せな

いから」

そう言って真純を右手の応接室に促した。真純は瑞希と一緒に応接室に入る。

まずはいつものように書類を交換していると、先ほど応対に出た女性が、コーヒーを運んできた。

彼女が立ち去るのを待って、真純は切り出した。

「下で話せない事って何？」

「昨日話したハルコの挙動不審について調べてみたのよ」

瑞希はコーヒーを一口すすって、話し始めた。

少し前から辺奈商事では、ハルコを使ったコンピュータセキュリティ事業を展開しているという。

契約した会社のサーバを不正アクセスやウィルスの侵入から、ハルコが監視し守るというものらしい。

セキュリティ事業は瑞希の管轄ではなく、業務状況にはノートタッチだったようだ。

ところがハルコが何を捜しているのか探っていく内に、その原因がセキュリティ事業に関係している事が分かったらしい。

「どうやら初恋の彼に再会したらしいのよね。メッセージのログが残ってたわ。多分、彼を捜してるんだと思うの」

「でも、それって、わざわざコソコソ話するような事なの？」

真純が口を挟むと、瑞希は真剣な表情で話を続けた。

「問題はそこじゃないのよ。ハルコがセキュリティ事業で再会したって事は、彼は不正アクセスを行ってたって事なの。その日時は三日前の夜。場所はあるんちの近所のビジネスホテルよ。ハルコが通報してセキュリティ会社が駆けつけた時には、ホテルの部屋はもぬけの殻だったそうよ。そして翌日の午前中、同じ会社のサーバにまた不正アクセスがあったの。同一人物かどうか分からないって管理担当者は言ってたけど、私は同一人物だと思うわ」

「どうして、そう思うの？」

真純の問いかけに、瑞希は確信に満ちた目で告げる。

「だって一回目のアクセスはあんたんちからだっただんだもの」

絶対、猫が好き！ (8)

「私じゃないよ！　だって不正アクセスなんて、どうやるんだか知らないもの！」

真純が慌てて否定すると、瑞希は目を伏せて軽く息を吐く。

「あんたじゃない事は分かってるわよ。あんたのアリバイは立証されてるもの。二回目の時、あんたは二階のカフェで私と会ってたんだから。カフェの従業員も証言してくれるわ」

自分の無実が証明された事に、真純はホッと胸をなで下ろす。それと同時に、別の不安が胸の中を支配した。

それを見透かしたように、瑞希は真純を見据える。

「あんたじゃないなら、誰だか分かるでしょ？」

真純が留守の間、家にいたのはシンヤだ。

だがあの日、シンヤはクライアントに呼び出されて出かけていた。その隙に誰か別の人間が、忍び込んだのかもしれない。それを話すと、瑞希は呆れたように首を振った。

「わざわざ他人の家に忍び込んで、捕まるリスクを冒すより、ネットカフェにでも行くのが普通でしょ。シンヤくんをかばいたい気持ちには分からなくもないけど、偶然で片付けるにはできすぎてるわ」

真純は言葉もなく俯く。

シンヤを拾ったのは三日前の夜。彼は行く当てもなく途方に暮れて、道端に座り込んでいた。

それは不正アクセスがセキュリティ会社に発覚して、ホテルから逃げ出してきたところだったのだろうか。

翌日同じサーバに再びアクセスしたのは、真純に罪を着せるため？　だったらなぜ、また戻って来たのだろう。そして今も、出て行かないのはどうして？

黙り込む真純に、瑞希は淡々と告げる。

「ちよっと調べてみたんだけど、彼ね、アンダーグラウンドじゃ結構有名なハッカーみたいよ。主なクライアントは企業人。だから産業スパイみたいな事してたみたいね。個人相手には、色々怪しいツールや新種のコンピュータウイルスをネット販売してたようよ。ハンドルネームはシンヤ。真夜中に出没するからだって。奇しくも名前の由来はあんたと同じね」

それで名付けた時、驚いたような顔をしていたわけだ。

瑞希が言うには、シンヤはいつも唐突にアングラサイトの掲示板に現れて、サイトのアドレスを書き込んでいく。アドレスは毎回違うようで、一定時間が経過すると繋がらなくなるらしい。

客からメッセージがあると、必ず現れていたシンヤが、ここ三日間姿を現さないのも、何かあったのではないかと、勝手な憶測で盛り上がっているのを瑞希は見たという。

「その掲示板のアドレス教えて」

シンヤの素顔を確かめたくて尋ねると、瑞希は即座に拒否した。

「ダメよ。そういう怪しいサイトがひしめき合ってるアンダーグラウンドは、素人が無防備にうろついたら痛い目に遭うわよ。知らない間に怪しいクッキーやウイルスを仕込まれたり、個人情報抜き取られたり、覗いただけでブラウザやマシンをクラッシュさせるサイトもあるんだから」

「でも瑞希は無事だったんでしょ？」

「私は素人じゃないもの。それにハルコのガードがあつたし。ハルコの検索履歴を辿ったんだけどね」

ハルコには不正アクセスを、厳しく禁じているという。昔シンヤと出会った時、ハルコが勝手に不正アクセスをして警察沙汰になったからだ。

そのためハルコは、社外では誰でもアクセスできるインターネット上と、自分の監視している取引先のサーバにしかアクセスできない。

シンヤはその筋では、名の知れたハッカーだ。それなりの腕も持っている。これまでハッキングがばれた事はないらしい。

今回ハルコに居場所まで突き止められてしまったのは、シンヤが中継地点にしていた全てのサーバが、たまたまハルコのアクセス可能なサーバだったからだ。

「でも大胆よね。どんな用事があったんだか、一度しっぽを掴まれたサーバに、別ルートからとはいえ、もう一度侵入するっていうのも信じられないけど、自分を捕まえようとしたハルコを踏み台にしたのよ」

「どういう事？」

「あんたのマシンってハルコに直結してるじゃない。彼、ハルコ経由で二度目の不正アクセスを行ったのよ。あんたのユーザIDとパスワードで正面からハルコに接続して、ハルコから目的のサーバにアクセスしたの」

通常、無関係の外部から、ハルコに侵入するのは容易ではない。ハルコ自身の監視の目と、ハルコの挙動を監視するシステムと、二つの監視をくぐり抜けないとまらないからだ。

だが、元々接続が許されているIDとパスワードがあれば、難なくハルコの内部に入る事が出来る。もっとも、IDごとにアクセスできる範囲は限定されている。

ハルコから外部への不正アクセスも、ハルコ監視システムのせいでは困難なはずだ。その先はシンヤが何か技を使って、目的のサーバに侵入したのだろう。

「私、パスワードとか教えてないよ」

「コンピュータの中、調べれば分かるのよ。そういうイケナイツールもあるの」

「でもパソコンを立ち上げる時にもパスワードがいるでしょ？ それはどうやって調べるの？」

「それはヒミツ。あんたがハッカーになったら困るから」

瑞希はニツコリ笑って、はぐらかした。

不正アクセスは犯罪だ。シンヤは警察に逮捕されるのだろうか。もしも、そのために協力しなければならなかったら、なんとなく気が重い。

真純は俯いて、瑞希に尋ねた。

「シンヤは逮捕されるの？」

「それは無理ね。状況証拠だけで、あんたの拾ったシンヤくんとハッকারのシンヤが同一人物だという証拠はないし、二度の不正アクセスを行ったのがシンヤくんだという証拠もないもの。たとえあんたのマシンにシンヤくんの指紋が残っていたとしても、一緒に住んでるわけだし、彼は掃除係なんですよ？ 掃除の時、うっかり触ったって言われれば、それまでなもの」

「私はどうすればいい？」

「あんたのIDは使用停止にしたわ。いずれ別のものを再発行するけど、その前に彼に出て行ってもらって」

「うん……」

真純は力なく頷く。項垂れたまま、ぼんやりと考えた。

シンヤに渡した合鍵を返してもらわなければ。今後勝手に入り込まれたらマズイから、家の鍵を付け替えなければならないだろう。なにしろ相手は犯罪者だ。

もっと警戒した方がいい。簡単に人を信じるな。それは自分の事を言っていたのだ。

あの子犬のように人懐こい笑顔に騙されて、まんまと信用した真純は、シンヤの目にはさぞや滑稽に見えた事だろう。

真純の事を心配していたのも、好きだと言ったのも、絶対裏切らないと忠誠を誓ったのも、全部ウソ！

ぼんやりと見つめていた、ひざの上の手が、視界の中で次第に滲んで歪んでいく。

「真純……」

正面に座っていた瑞希が席を立って、真純の隣に座り直した。そっと真純を抱き寄せ、頭を撫でる。

「そんなにシンヤくんが好きだったの？」

「違う……」

「もう、素直じゃないんだから」

口では否定しながらも、こんな時になって真純は自覚した。

裏切られた事が腹立たしいと言うよりも、シンヤの言葉が全部ウソだった事が、こんなにも悲しい。

それほどシンヤを、好きになっていたのだ。

絶対、猫が好き！ (9)

気が重い。どうやって切り出そう。辺奈商事を出て家路を辿りながら、真純は何度もため息をついた。

辺奈商事の応接室で、涙が止まらなくなった真純を、瑞希は落ち着くまで黙って待ってくれた。やがて真純が落ち着きを取り戻すと、真純が言いにくいなら自分がついて行って、代わりにシンヤに話そうかと申し出てくれた。

しかし面識のない瑞希が突然やって来て、ハッカー呼ばわりしたら、シンヤが動揺して逃げ出してしまうかも知れない。

そうなたら真純としては困るのだ。シンヤには色々と、問い質したい事がある。

瑞希の申し出を断って、自分で話すと言ったものの、やはり気が重い。

おそらく瑞希の言った通り、シンヤはハッカーなのだろう。本人が否認しても、出て行ってもらうように瑞希には言われている。

シンヤが出て行ったら、もう二度と会えない。会ってはいけない。たとえ辺奈商事の情報を漏らしたりしなくても、ハッカーと接触している者に、会社は仕事を任せたりしないだろう。最悪、真純はクビになるかもしれない。

シンヤと一緒にいられるのは、あとほんの少しだけ。

自分が会社を辞めればシンヤとは別れなくてもいいのかもしれないが、それは心配してくれた瑞希を裏切る行為だ。

学生時代からの親友を裏切って、男に走るほどの情熱は真純にはなかった。こんなところは、つくづく自分は冷めた大人なんだな、と思う。

シンヤと同年代の若さがあれば、勢いに任せてシンヤを選んだか

もしれないのに。

けれどシンヤに騙されていたと分かった今でも、彼を憎みきれずにいる。

あの子犬のように人懐こい笑顔も、隙あらばまとわりついてくる温かい腕も、もうすぐ失われてしまう。それを思うと、胸が痛んだ。できるだけゆっくり歩いたつもりなのに、気が付けば家にたどり着いていた。

ゆっくりと玄関の扉を開ける。すると、昨日と同じように、シンヤが笑顔で駆け寄ってきた。

「真純さん、おかえりーっ！」

「待て！」

「え？」

真純が険しい表情で命令すると、シンヤは不思議そうな顔をしながら、廊下の途中で立ち止まった。

今抱きしめられたら、決意が揺らいでしまいそうな気がする。

真純はシンヤを見据えたまま、廊下の奥を指差した。

「リビングに戻って」

「うん……」

シンヤは戸惑いがちに返事をして、廊下を引き返した。

リビングに入ると、シンヤはソファの側に立ったまま、真純を待っていた。真純はソファへと促す。

「座って」

黙って腰を下ろすシンヤを見ながら、真純も斜め前の席についた。何から話そう。また、はぐらかされたり騙されたりしないように、上手く話さなければ。

そんな事を考えながら黙って俯いていると、シンヤの方が口を開いた。

「どうしたの？ 怖い顔して。会社で何かあったの？」

真純は顔を上げて、シンヤを見つめる。

シンヤは何も感付いていないのだろうか。真純が辺奈商事から帰

って、シンヤに何を話そうとしているのか。それとも心配するフリをして、探りを入れている？

勘繰っていても仕方ない。元々、小細工や駆け引きは苦手だ。

真純は意を決して、正面からぶつかるとした。

「訊きたい事があるの。ごまかしたり、はぐらかしたりしないで、正直に答えて」

「うん……」

シンヤはまだ何の事か分からないと言った表情で、不安げに見つめている。

真純は単刀直入に尋ねた。

「シンヤって、ハッカーなの？」

「え？」

さすがにシンヤの顔が強ばった。これだけでは、またはぐらかされるような気がする。真純はシンヤの返事を待たず、話を続けた。

「三日前とその翌日、辺奈商事のコンピュータ、ハルコが不正アクセスをキャッチしてる。三日前はともかく、その翌日のは、ここにある私のパソコンから、私の留守中にアクセスがあったらしい。それって、シンヤだよな？」

「バレちゃったんだね……」

シンヤは目を伏せて、無表情のままつぶやいた。

否定しない。やっぱり瑞希の言った通りだったようだ。

「ここからアクセスしたのは、私に罪を着せるため？」

「違うよ！」

シンヤは弾かれたように顔を上げて、即座に否定する。

訊きたい事は他にもある。真純は感情を押し殺して、努めて冷静に問いかけた。

「じゃあ、どうして？」

「……目的のサーバは前の日に侵入した事が知られてる。だから外部からの侵入は警戒してるはずだ。でもハルコが合法的に介入してきたって事は、ハルコ経由なら警戒されないと思って……。真純さ

んのIDのアクセス権限を書き換えて、後で戻しておけば、ハルコ自身にも、しばらくは感付かれないし」

「何のために同じサーバに、また侵入したの？」

「後始末。前の日に途中で追い出されたから」

通常、侵入がばれた後に、後始末なんてするものなのだろうか、と怪訝に思う。

けれどそれより、もっと不可解な行動をシンヤは取っている。

「私が辺奈商事の在宅社員だって、最初から知ってたの？」

「ううん。それは偶然。ラッキーって思ったけど」

これは本音だろう。

「じゃあ、用が済んだら出て行けばよかったんじゃないの？ そうすれば、こんな風に問い詰められる事もなかったのに」

シンヤは再び視線を落として項垂れた。

「それは……真純さんが心配だったから……」

まただ。

「何が心配なの？ 今度はちゃんと話して」

シンヤは項垂れたまま黙り込む。そして観念したように、か細い声で答えた。

「僕がここにいてる事を、侵入したサーバの会社に知られたんだ。正確には、その社員で僕の裏稼業を知ってる奴」

たまたまシンヤと同じビジネスホテルにいたそいつは、突然会社との通信が途絶え、会社に問い合わせたところ、同じホテルに”シンヤ”がいる事を知ったらしい。

折しも慌ただしくホテルを飛び出すシンヤを見かけ、怪しいと踏んで後をつけたのだ。そいつは真純をシンヤの恋人だと勘違いしたようだ。

翌日、商談のため訪れた辺奈商事で、瑞希と話している真純を見たそいつは、野心にとらわれたらしい。

シンヤが”シンヤ”であるという確たる証拠はない。会社に知らせたとして、自分にも会社にも、何のメリットもない。もしもシン

ヤが逮捕されたとしても、せいぜい警察からの感謝状止まりだ。それより弱みを握っているシンヤを利用しようと考えた。

そのいつの会社は辺奈商事の取引先で協力会社であると同時に、同業種ではライバル会社でもある。

辺奈商事の経営に関する情報が手に入れば、会社は優位に立てる。その情報を自分が提供できたら、出世や昇給が見込めると考えたのだろう。

そいつは、つい最近シンヤのネット販売を利用した事があった。ダメ元で、その時知ったアドレスに、メールを送ってきたらしい。破棄しようと思っていたアドレスに、突然やって来たメールにシンヤは驚いた。そこにはシンヤの居場所である真純の住所や、真純の勤務先、瑞希と知り合いである事などが書かれている。

ただのハツタリではない事が分かり、シンヤは呼び出しに応じた。要求は辺奈商事の情報。

本当はハルコ経由でハッキングを完了した後だったが、昨日の今日でハルコには侵入が難しいと断った。するとそいつは、真純を利用すれば可能ではないかと提案した。

「でも、イヤだったんだ。僕なんかを信用して拾ってくれた真純さんを利用するのは。それで交渉は決裂。そしたらあいつ笑いながら言うんだ。真純さんに直接交渉するって。多少は強引な手を使うかもって」

シンヤは頭を抱えて、更に項垂れた。

今のところ何の被害もないが、そのいつの言う事が、ただの脅しかどうかは分からない。

シンヤが何を心配しているのかは分かった。どうして出て行かないのかも。

けれど、ただ拾ってもらったという恩で、そこまで義理立てする理由が分からない。

「侵入の後始末が済んだんだから、私がどうなろうと放っという逃げればいいじゃん」

「できないよ、そんな事！」

「なんで？ たとえそいつが強引な直接交渉に来たって、私には刃奈商事の極秘データにアクセスできる権限はないし、おまえのように権限無視して引っ張り出す事も出来ないんだし。おまえに連絡のつけようがなければ、私には人質の価値もないでしょ？」

シンヤは真顔で、真っ直ぐに真純を見つめた。そして声のトーンを少し低くして問いかける。

「本気でそんな風に思ってる？」

あまりに真剣な眼差しにドキリとして、真純は少したじろいだ。「どういう意味？」

真純の言葉に、シンヤは眉をひそめて、苛々したように言う。

「本当に分かってないの？ あいつにさえ、あっさり見破られたのに。それとも、はぐらかしてる？ 僕、何度も言ったよね。真純さんが好きなんだよ」

「……信用できない」

真純は目を逸らして俯いた。

確かに何度か、好きだと言われた。今聞いた話も辻褄は合っている。けれどシンヤのやってきた事は犯罪だ。

冷蔵庫を開けるのは断るくせに、パソコンは黙って犯罪に利用する。何が本当で何がウソなのか判別できない。

本当は嬉しいはずの真面目な告白を、真純は素直に喜べないでいた。

考え込んでいると、目の前で声がした。

「信用しなくていいよ。分かってくれるだけで」

顔を上げると、目の前の床にひざ立ちで、シンヤが微笑みながら見つめていた。

立っていると遙か上に見上げるシンヤの顔が、今は目の前にある。この人懐こい笑顔に騙されたのだ。けれど、この笑顔が好きだった。多分もう見納めだから、しっかり見ておこう。

真純はシンヤをじっと見つめ返す。見つめるシンヤの顔が、次第

に近付いて来た。

身体を倒し、真純が座るソファの背もたれに両手をつく。真純はその両腕の間に閉じ込められた。

息がかかるほどの距離に、迫ったシンヤが囁く。

「分かってくれるまで、何度でも言う。好きだよ、真純さん」

シンヤは更に、距離を詰めてくる。

顔をしっかりと見ておきたいのに、あまりに近すぎて焦点が合わず、真純は目を閉じた。

シンヤの唇が、真純の唇に重なる。

こうなる事は分かっていて、目を閉じた。拒む気もなかった。

シンヤに触れるのはこれが最後だから、忘れられない思い出が欲しかった。

シンヤの優しく慈しむようなキスに、涙が溢れそうになる。

少しして、シンヤの唇が離れた。

真純は目を開き、けれど目を合わせないように俯いて、シンヤを両手で突き放した。

「出て行って」

絶対、猫が好き！ (10)

部屋に散らばっていた荷物をまとめてバッグに詰め込み、進弥は力なくベッドに座った。

ひざの上でノートパソコンを開き、メールをチェックする。

あれ以来、あいつからメールは来ない。廃棄しようと思っていたが、真純の事を考えると、念のため残しておいたのだ。

今日も来ていないようだ。進弥はパソコンを閉じて、ブリーフケースに片付けた。

「私が戻るまでに出て行って」

そう言い残して、真純は進弥の制止を振り切り、家を出ていった。しばらく身を隠せればいい。正体がバレたら、ゲームオーバー。

そうなる前に出て行けばいい。最初はそんな軽い気持ちだった。

やけにあっさり家に入れてくれたので、若い男と遊びたいだけの軽い女だろうと思った。ほんの少し好意を見せれば、簡単に誘いに乗ってくるだろうと。

ところが真純は、無防備に見知らぬ男を招き入れる割に、驚くほどクールでガードが堅い。

色々個人的な事を訊いてきたり、食事を作ってくれたり、自分に好意を示しているのだろうと思い、捕まえようとする、スルリとすり抜けていく。まるで猫だ。

逃げられると追いたくなるのは、犬の本能か、オスの性か、真純が進弥を拾ったのには何も裏がない事が分かり、気が付けば本気で捕まえようとしていた。

皮肉な事に、あいつに真純の事を恋人だと勘違いされ、気付かされた。

自分が捕まえる前に、あいつにも他の誰にも、真純を攫われたく

なかった。

「やっと捕まえたと思ったのにな……」

普通、二十五を過ぎた女は自分の年を言いたがらないのに、真純は免許証と共に実年齢を明かし、自分の方がうんと年上である事を主張した。

几帳面で時間に厳しい真純は、進弥の事を世話の焼ける子犬だとしか思っていないようにも見えた。

元々相手にされていなかったのかもしれない。

おまえ呼ばわりを拒否したのに、未だにおまえ呼ばわりされているし、進弥のアピールにも真純のリアクションは冷めている。

信用されていないのだから、当然な気もする。

——簡単に人を信じるな——

それは自分自身に、言い聞かせている事だった。自分がそのせいで、結果的に社会からドロップアウトするハメになったから。

三年前、ハルコの不正アクセスで、進弥は辺奈博士から挑戦状を叩きつけられた。

「本物のハルコに会いたかったら、ここまで来なさい」

その言葉に煽られて、必ずそこまで行ってやると誓ったのだ。

当時の進弥は、商業高校の二年生だった。

ハルコに会うためには、辺奈商事に入社するしかない。

大手総合商社である辺奈商事の、高卒者新卒枠は、かなり狭き門だった。大卒者も決して広くはない。おまけに新入社員は、希望通りの部署に、配属されるかどうかは分からない。

ところが情報システム部に限り、年齢学歴不問で、随時中途採用を受け付けている事を知った。

ハルコは情報システム部にいるはずだ。当てにならない新卒枠を狙うより、実力と業務経験を身につけて、中途採用枠を狙おうと、進弥は高卒で小さなソフトハウスに入社した。

その会社は主に地元企業のシステム開発を請け負う傍ら、自社独自のパッケージソフトの開発にも力を入れていた。

企業の請負だけでは、景気が悪化した時、会社が傾く危険性があるからだと言長は言う。

コンピュータシステム開発の発注は、企業にとって設備投資だ。国の制度や政策の変更でやむを得ない場合を除いては、会社の経営状態に余裕がある時にしか、資金は投じたくないものだ。

不景気になれば、ソフトハウスは、モロに煽りを食らう。不景気のダメージを軽減するため、会社は一般ユーザ向けのパッケージソフトを開発する事にしたらしい。

進弥は入社三年目の先輩に指導を受けながら、プログラムの製造を行っていた。

プログラミングの知識は元々あったが、チームでのシステム開発の手順や業務知識など、学ぶ事は多い。一步一步ハルコに近付いているのだと思うと、仕事が楽しかった。

会社では毎月一回、パッケージソフトの企画会議が行われる。

会議に出席するのは、主任以上なので進弥は出席できない。けれど、出席できない社員の提案は、主任以上の者がとりまとめて発表する事になっていた。

進弥を指導する先輩は主任だったので、進弥も一つ提案してみた。毎月会議で提案された企画を検討はするが、採用される事は滅多にないらしい。あまり期待はするなと言われたが、会議から戻った先輩は、進弥の企画が採用された事を興奮したように伝えた。進弥は先輩と共に、パッケージ開発チームに入る事になった。

その翌週、手渡された企画書を見て、進弥は愕然とした。企画立案者が先輩の名前になっていたのだ。

先輩に尋ねると、自分も今見て驚いたと言う。何か手違いがあったのかもしれないので、自分から伝えておくと言われ、先輩に任せた。

ところが結局、開発の終了まで、名前が書き換えられる事はなかった。

手放して企画を褒め称える上司を前にして、自分ではないと言

出せなかったと、先輩は進弥に頭を下げた。

自分より六つも年上の先輩が、平身低頭している様は気の毒で、責める事が出来なかった。

出来上がったパッケージソフトは、そこそ売れたようだ。それにより先輩は会社から褒賞金を受け取ったらしいと同僚から聞いたが、先輩から進弥へは何の話もなかった。

少しして再び進弥の提案した企画が、先輩の名前で採用された。

二度目ともなれば、手違いでない事は分かる。先輩も今度はごまかすつもりがなかったようだ。前回の功績が認められている自分の名前だからこそ、採用されたのだと開き直った。

このままここにおいても、自分の業務経歴にはならず、先輩に功績と褒賞金を与える事になるのかと思うとバカバカしくて、進弥は会社を辞めた。

今度は上手く立ち回ろうと別の会社を当たってみたが、世の中は甘くなかった。

入社一年未満で自主退職した進弥の履歴書は、人事担当者に受けが悪い。おまけに業務経歴はほんの二、三で、担当作業はプログラミングのみ。

経験値がものを言う中途採用では、分が悪すぎる。大概是書類選考で落とされ、面接までこぎ着ける事は稀だった。

不採用の数を積み重ねるごとに進弥は、暇潰しで始めたハッキングにのめり込んで行った。

侵入したサーバに、時々コンピュータウイルスを置き土産にして、パニックに陥る様子を想像しながら、虚しい自己満足に浸る。

そんな事を繰り返しながら、入手した顧客リストをアンダーグラウンドで販売したら、思いも寄らない高値がついた。

何度か販売している内に、情報入手の依頼が来るようになった。入手した情報を業者に売って金にしようとする奴や、出世の足がかりにしようとする奴。

”シンヤ”に情報入手を依頼するのは、そんな奴らだ。

自分を食い物にした先輩を思い出し、怒りがこみ上げてくる。欲に目のくらんだこいつらを、今度は自分が食い物にしてやろうと、多額の報酬をふっかけた。

それでも依頼は、途絶える事がなかった。

そうして進弥は、闇の世界に墜ちていった。

就職を機に一人暮らしを始めた進弥が、会社を辞めた事を親は知らない。裏稼業を始めてからは、その部屋も引き払い、ビジネスホテルやウィークリーマンションを点々とした。居場所を特定されても、足が付かないようにするためだ。

長期出張が多いため、そうしてあると親にはウソをついた。

真純と出会ったあの日、目指していたはずのハルコに邪魔をされ、初めてハッキングに失敗した。突然居場所がなくなり、ほとぼりが冷めるまでの居場所を真純に求めた。

けれど真純と一緒にいたくて、そのまま裏社会からフェードアウトしてしまいたくなった。

あいつが何も行動を起こさなければ、もう一度再就職の道を探ってみようと思い始めていた。

なのに、その前に自分の正体が、辺奈商事にバレてしまった。

このままここにはいては、真純に迷惑がかかる。真純にも出て行ってくれと言われた。

分かっている、重い腰がなかなか上がらない。ここを出て行ったら、もう二度と真純に会えなくなるからだ。

荷物を手に取ったものの、踏ん切りがつかないまま、ぼんやりしている、ポケットの携帯電話が、メールの着信を告げた。

確認すると、真純からのメールだった。不審に思いながら、メールを開く。

そこには文章はなく、画像が添付されているだけだった。

何かの場所を示したものと思われる地図の画像。スクロールさせてその下にあるもう一枚の画像を目にした時、背中に冷水を浴びせられたような気がして、進弥の目は一気に見開かれた。

口にガムテープを貼られ、ぐったりとして目を閉じた、真純の姿がそこにあった。

進弥は荷物を置いたまま、玄関と門扉の施錠ももどかしく、急いで家を飛び出した。

絶対、猫が好き！ (11)

どうしてこんな事になっているんだろう。

真純は自分の置かれている状況が、今ひとつ飲み込めずにいた。

ここは雑居ビルの一室で、どこかの会社が倉庫代わりに使っているようだ。

元々は会議室だったのかもしれない。壁際にはホワイトボードがあり、その前には丸い会議机が置かれている。

だが部屋の中は雑然としていて、折りたたみ式の長机やスチール製の棚の上には、段ボール箱が無造作に積み上げられ、床には綿埃の塊が、あちこちに転がっていた。

真純は薄暗い部屋のほぼ中央で、パイプ椅子に座らされていた。

口はガムテープで塞がれ、両手は椅子を抱えるように後ろ手で縛られている。足も縛られているので、逃げ出す事も思うように声を発する事も出来なかった。

目隠しをされて車で連れてこられたので、ここがどこだか分からない。

あまり安心できる状況ではなさそうだが、とりあえず今すぐ命の危険があるわけでもなさそうだ。

シンヤに出て行くように言い渡して家を出た後、行く当てもなく近所を歩いていると、後ろからやって来た車が、目の前の路肩に止まった。

そして、中から下りてきた男が、真純に声をかけた。

スーツにネクタイのどこにでもいる会社員風の男は、シンヤより大分背が低く細身で、とがった鼻と狡猾そうな細い目が、爬虫類を思わせる。

男は真純に、一緒に住んでいるのは”シンヤ”だろうと問いかけた。最初は辺奈商事の社員かと思った。だが、すぐに違うと分かつ

た。

男はいきなり真純の腕を掴み、刃の出たカッターナイフを突きつけてきたからだ。

今思えば、サバイバルナイフとかではなく、カッターナイフというところが、いかにも会社員っぽい。

この男はおそらく、シンヤが言っていた辺奈商事のライバル会社の社員だろう。

真純に強引な直接交渉をするという話だったが、端から交渉する意思はないように思われる。

真純はカッターナイフの刃を見つめて息を飲んだ。ヘタに切れ味を知っているので、リアルな痛みの記憶が、身をすくませる。言いなりになるしかなかった。

言われるままに助手席に乗り込みシートベルトを締めると、男は真純にアイマスクをつけ、帽子を目深にかぶらせた。

視界が奪われ、相手が何をしているのか分からなくなる。うかつな行動も取れず、真純は何も出来ないまま車で連れ去られた。

しばらく車で走った後、目隠しをしたまま手を引かれて、わけのわからないうちに、今のような状態にされてしまった。

男は真純を縛り上げた後、ポケットから携帯電話を取り上げた。

そして帽子とアイマスクを外す。眩しくて目を閉じたところを、いきなり写真に撮られた。

「お、いいね。この表情」

撮った写真を見て、男が楽しそうに言う。絶対に、いい表情なわけがない。

男は少しの間、真純の携帯電話を操作して、机の上に置いた。

真純の電話には、シンヤの番号とメールアドレスが登録してある。おそらくシンヤに、メールで写真を送ったのだろう。

「今呼んだから、カレシが来るまで、もうしばらく我慢してね」

口調は柔らかいが、目は笑っていない。しばらくとは、どれくらいなんだろう。

背の低い真純は、椅子に深く腰掛けると、床に足が届かない。座っていても結構辛いのだ。

そんな事より、シンヤが来るかどうか分からない事の方が問題だ。出て行ってくれと、冷たく突き放したのだ。怒って出て行ったなら、真純からのメールなど、無視されるかもしれない。

シンヤが来なかったら、自分はいったい、どうなってしまうのだろうか。それを考えると、背筋が寒くなった。

真純の心中をよそに、男はすっかりリラックスした様子で、会議机に浅く腰掛けて、自分の携帯電話をいじったり、時々窓辺に寄って外を眺めたりした。

突然男の携帯電話が鳴った。

もしかして、シンヤ？ そう思って男を見つめる。だが、どうやら違ったらしい。

男は愛想のいい声で、応対に出た。相手は会社の取引先のようなのだ。この男は営業マンなのだろう。営業マンなら、平日の昼間に長い間出歩いても、会社から不審に思われる事はない。

営業電話を切った後、男は再びヒマそうに、携帯電話をいじり始めた。

どれだけ時間が経ったのだろう。外は日が傾き始め、部屋の中は益々薄暗くなって来た。

固いパイプ椅子に座ったままで、身体中あちこち痛くもなってきた。

呑気そうにしていた男も次第に苛々した様子で、窓の外を眺める頻度も増してきた。

窓の外を眺めていた男が舌打ちをして、吐き捨てるように言う。「おっせーな」

そして真純の方に近付いて来た。目の前に立った男は、真純を見下ろしながら嘲笑う。

「あんた、見捨てられたのかもな。あいつ、元々犯罪者だし」
こんな事をしているおまえも、充分犯罪者だ、と口が塞がれてい

なければ言ってやりたいところだ。

「もっと過激な写真を送ってやればよかったかな」

そう言って男は、真純に手を伸ばしてきた。

「うーっ！」とうなつて、真純は咄嗟に足を振り上げた。その反動で、椅子が後ろに傾く。

「あ、バカッ……！」

男が捕まえようとした時にはすでに遅く、真純は椅子ごと後ろに倒れ、思い切り後頭部を床にぶつけた。椅子と床に挟まれて、腕も痛い。

「あーあ」

呆れたような声を発して男がしゃがみ込み、椅子を引き起こそうとした。ちょうどその時、入口の扉が、派手な音を立てて開いた。男と同時にそちらへ視線を向けると、入口に息を切らしたシンヤが立っていた。

男は椅子から手を離し、立ち上がる。そこへシンヤが、いきなり男に掴みかかって、真純から引き離した。

どうせなら椅子を起こしてから、立ち上がって欲しかったと思いつつ、真純は椅子ごと横に転がる。視線の先でシンヤが、男のスーツの襟を両手で掴んで怒鳴った。

「彼女に何をした?!」

これほど激昂したシンヤは初めて見た。男の方もその迫力に気圧されて、オタオタと言いつつ訳をする。

「落ち付いて、まだ何もしてねーよ」

”まだ”って、何かするつもりだったのだろうか。

シンヤは男を睨みつけた後、突き飛ばすようにして手を離れた。そして男を目で牽制しつつ、真純の元にやってくる。

側まで来たシンヤは、真純の背後に回って、腕を縛った縄をほどき始めた。男は先ほどのシンヤの剣幕に恐れをなしたのか、少し離れた場所から様子を見ながら声をかけてきた。

「辺奈商事の情報は持ってきたのか？」

シンヤは手を止めることなく、苛々したように言う。

「それは断つただろう。何度も言わせんな」

腕の縄がほどけて、真純は身体を起こし、口に貼られたガムテープをはがしにかかった。シンヤは続いて、足の縄をほどき始める。完全に蚊帳の外に置かれた男は、声を荒げた。

「おい！ その女がどうなってもいいのか？！」

足の縄をほどき終わったシンヤは、立ち上がった。真純も立ち上がると、シンヤは片手で真純を自分の後ろへ下がらせた。

そして、呆れたように嘆息と言う。

「あんた、バカだろう。人質ってのは自分の手元にあつてこそ意味があるんじゃないの？ そんな離れたところにいて何言ってるんだよ。まあ、元々頭悪い奴だとは思ってたけど」

「何？！」

シンヤの言葉に、男は頬を紅潮させる。

ハラハラしながら見守っていると、シンヤは落ち着いた様子で言葉が続けた。

「この間のメール、会社のアドレスで送ってきただろ」

確かにあまり賢いとは言えない。

容易に変更できない会社のメールアドレスを、誰だか分からない相手に明かすなど、コンピュータに詳しくない真純でも絶対にしない。

おまけに相手は、ハッカーだと分かっているのに。

男は多少うろたえながらも言い返した。

「それがどうした。オレの会社はメールの内容から誰にでも分かる事だ」

シンヤの声が少し低くなる。

「あんた、オレをナメてないか？ それだけ分かってりゃ充分なんだよ。あんたの事、丸裸にして世界中にバラまいてやってもいいんだぜ」

男が息を飲んで絶句した。

これがシンヤの裏の顔だ。いつもの人懐こい子犬の表情からは想像も出来ず、真純も少し息を飲む。

シンヤはおもしろそうに笑いながら言う。

「まあ、あんたの個人情報なんて、全世界の大多数の人には、どうだっていい情報だろうけど。代わりにあんたの会社のサーバに仕込んだウイルス、起こしといたから。あんたが彼女に手出ししなけりゃ、ずっと眠らせとくつもりだったんだけどね。ついでにウイルスが起動したら、感染元はあんただってというメールが社長に届くようにしておいたよ」

「なんだって?!」

男は頭を抱えて、おもしろいほどにうろたえた。

シンヤはポケットから小さな紙切れを取り出し、指に挟んで男に見せつける。

「チャンスやるよ。サーバの内蔵タイマが今日の十八時になった時、ウイルスは起動する。十七時三十分には五秒間だけ、停止パスワードを受け付けるウィンドウが表示されるんだ。今後オレたちに手出ししないって誓うなら、パスワードあげるけど?」

男は歯噛みしながら、ヒラヒラと挑発的に振られる、シンヤの指先を見つめる。

「急いだ方がいいんじゃない? もう十七時過ぎてると思うけどな」
その言葉に弾かれたように、男はツカツカとシンヤに歩み寄り、素早く紙切れを奪い取った。

「よこせ! 誰がおまえなんか二度と関わるもんか!」
捨て台詞を残して、男はバタバタと部屋を飛び出して行った。

絶対、猫が好き！ (12)

シンヤは入口の外へ顔を出して、男を見送りながら呑気につぶやく。

「いいのかな。この部屋、開けっ放しで行ったけど……」

振り向いて部屋に戻ってきたシンヤは、先ほどまでの裏の顔は微塵も感じさせないほど、いつもと変わらない表情だった。やっぱり二面性のある奴だ。

シンヤは真純の側まで来ると、少し身を屈めて、心配そうに顔を覗き込む。

「真純さん、大丈夫？ ケガとかしてない？」

「大丈夫。縛られてただけだから」

真純は視線を逸らし、自分の手首を撫でた。その手を取り、シンヤが握った手の親指の腹で、手首に残る跡を撫でる。

「跡がついてる。痛かったでしょ？」

「平気。大したことないから」

自分の手を奪い返し、真純は俯いた。

先ほどの男との会話を思い出すと、シンヤはハッカーを止めるつもりがないように思える。

それほど生き生きとしているように感じた。

犯罪から足を洗い、ほとぼりが冷めたなら、また会って話をするくらいは、瑞希も許してくれるのではないかと、甘い期待を寄せていた。

真純は俯いたまま問いかけた。

「またハッキングしたの？」

「してないよ」

意外な答えに、真純は思わず顔を上げて、シンヤを見つめた。

「だってさっき、私に手出ししたから、ウイルスを起動させたと言ってなかった？」

「全部ハッター。真純さんの写真見たら頭が真っ白になって、気付いたら家を飛び出してた。そんな余裕なかったよ」

「ずいぶん余裕があるように見えたが、演技だったとは思わなかった。」

「じゃあ、あのパスワードもデタラメ？」

「あれは本物。ウイルスっていうか、イタズラプログラムを仕込んであるのは本当だから」

「イタズラって……」

「いかにもウイルスに感染しましたって感じのメッセージが、サーバに繋がれた全パソコンに表示されるだけ。起動するのは今日じゃなくて仕込んでから百日後。停止パスワードの受付ウィンドウは毎日出るけど、五秒間だけだし、サーバのモニタをずっと見てる人なんていないだろうから、気付いてないんじゃないかな」

「それはおそらく、ハルコ経由で侵入した時の”後始末”で置いてきたのだろう。」

「どうして危険を冒してまで、そんなイタズラをしたのか、理由が分からない。」

「なので訊いてみた。シンヤは気まずそうに頭をかく。」

「ハルコにコケにされてムカついたから、仕返ししてやろうと思って。今考えると、大人げなかったよね」

「大人げないと言うより、完全に子供じみている。」

「照れくさそうに苦笑するシンヤを見て、真純は大きくため息をつく。」

「さっきのおまえ、別人みたいだった。”オレ”とか言ってるし」

「普通、相手によって使い分けるでしょう。女の人はいらないかもしれないけど」

「だって、口調まで違ってたし。いつもは猫かぶってたの？」

「猫はかぶってないよ。僕がかぶってたのは犬」

そう言ってシンヤはクスクス笑った。

顔を引きつらせる真純の背中を押して、シンヤが促す。

「あいつが戻って来たらヤバイから、そろそろここを出よう」

「そうだね。あいつカッターナイフ持ってたし」

「げっ！　そういうの先に言ってよ」

「私も余裕なかったの」

真純は無意識のうちに、シンヤの腰に腕を回して、横からしがみついた。

「シンヤが来てくれて嬉しかった。ありがとう」

シンヤは片手で真純の肩を抱き、静かに言う。

「札なんていいよ。僕のせいだし。怖い思いさせてごめん」

少ししてシンヤが、クスリと笑った。真純が不思議そうに見上げると、シンヤは笑いながら言う。

「いや、正面じゃなくて横つてのが、真純さんらしいなって」

途端に自分からしがみついたのが恥ずかしくなり、真純は慌ててシンヤから離れた。

「さっさと帰ろう」

シンヤの背中を叩いて、そそくさと出口へ向かう。背後でシンヤが笑いながら、からかった。

「真っ赤になってる。かーわいー」

「うるさい！　グズグズしてると置いてくよ！」

「はいはい」

シンヤを置いて先に廊下に出たものの、どっちへ行ったらいいかわからず、結局からかうシンヤに道案内をしてもらいながら家路についた。

家に帰り着くと、すっかり夜になっていた。あの雑居ビルは真純の家の最寄り駅から、電車で五つも先の町にあったのだ。

家に帰ったシンヤはすぐに二階に上がり、すでにまとめてあったらしい荷物を持って下りてきた。そのまま真っ直ぐ玄関に向かうシンヤに、真純は黙ってついて行く。

玄関に下りて靴を履いたシンヤは、振り返り真純に右手を差し出した。真純はその手を握り返す。

シンヤはいつもの人懐こい笑顔で、口を開いた。

「ちゃんと挨拶できてよかった。あのままじゃ後味悪かったし。短い間だったけど、真純さんに出会えて一緒に過ごせて楽しかった。色々ウソついて迷惑かけちゃったけど、これだけは絶対本当。僕、真純さんが好きだよ。きっと忘れないと思う」

どこか吹っ切れたようなシンヤの表情に、胸が痛くなる。自分はまだ吹っ切れていない。

もうすぐ終わりなのだと思うと、想いは益々募る。後悔しないように、ちゃんと伝えなければ。

真純はシンヤを見上げて微笑んだ。

「私も、おまえを忘れないよ。苛つく事も多かったけど、私もおまえに出会えてよかった。一緒に過ごせて楽しかった。そして、これもおまえと一緒に。私もシンヤが好きだよ」

シンヤから笑顔が消え、真純を見つめる目が、みるみる見開かれる。

「え……マジ?!」

突然シンヤは身を屈めて、真純を覗き込みながら、目の前で叫んだ。

あまりの驚きように、真純は少したじろいで顔を退く。

「何? そんなに驚く事? 僕の事好きだよねって決めつけてたじゃん」

「あれは、そう言ったら乗ってくるかと思って……」

シンヤは身体を起こし、口元を手で覆いながらつぶやいた。

「どうしよう……オレ、すっげー嬉しい……」

そしてシンヤは再び身を屈めると、目の前でイタズラっぽく笑っ

て尋ねる。

「ね、もう一回キスしていい？」

「う……」

一瞬ためらった後、真純は小さく頷いた。

「……最後だから……許す」

途端にシンヤは、大げさにのけぞって言う。

「ええ？ 最後まで許しちゃうの？ まいったなあ。オレ今、持ち合わせがないし……」

何の持ち合わせかは、あえて追及しない事にする。

「ちよつとコンビニに行つて……」

まだ続けるシンヤにイラツと来て、真純は声を荒げた。

「行かなくていいから！ 勝手に都合よく話をねじ曲げないで」

「冗談だつてば。そんなに怒るなよ」

シンヤは笑いながら真純の頬を両手で包み、上から顔を覗き込む。

真純は眉を寄せて睨みつけた。

「信じらんない。こんな時に冗談なんて」

「こんな時だからだよ。どうせなら笑って別れたいだろ？ でも、

オレの事怒ってる方が、真純らしいね」

呼び捨てにされて、ふと気付いた。シンヤの口調が変わっている。

「おまえ、また別人になってる？」

「うん。ってか、こっちが素。あんまり嬉しくて、かぶってた犬が逃げ出したみたい」

「何それ」

「いいから、黙って目を閉じて」

囁くようにそう言って、シンヤは顔を近付けてきた。真純は言われた通りに、黙って目を閉じる。そして、唇が重なった。

最初は優しく静かに。それが次第に激しく情熱的に変わっていく。さつきよりも長いキスに、真純の鼓動は早くなり、全身が熱を帯びていった。

少し息苦しくなってきた時、シンヤが唐突に唇を離した。

「これ以上は、マジヤバイ。冗談で済まなくなりそうだから」

そしてシンヤは、真純をきつく抱きしめた。

「ホント、真純が大好き。もう絶対忘れられない」

真純もシンヤの腰に腕を回して、抱きしめ返す。

「うん。私も絶対忘れないよ」

一際強く抱きしめて、シンヤは真純から身体を離れた。

ポケットからキーホルダーを取り出し、鍵を外して真純に渡す。

そして足元の荷物を持って、シンヤは軽く告げた。

「じゃあ、行くから。元気でね」

「うん。シンヤも元気で」

あまりにもあっさりと、まるでフラリと散歩にでも出かけるような調子で、シンヤは笑いながら軽く手を振って、家を出ていった。

玄関の扉が閉まりシンヤの気配が消えても、真純はしばらくの間その場に立ち尽くした。

手の中にある鍵に残る温もりに、シンヤの存在感と喪失感を改めて突きつけられ、真純は力が抜けたように廊下にペタリと座り込んだ。
だ。

堰を切ったように、止めどなく涙が溢れてくる。

後悔しないようにと思っていたのに、どうして引き止めなかったのだろうと、すでに後悔していた。

瑞希を裏切りたくないから、シンヤと別れた。けれど今後シンヤを思い出すたびに、何も悪くない瑞希を恨んでしまうかもしれない。それが元で瑞希とギクシャクしてしまったら、どちらかをはつきりと選ばなかった事で、どちらも失ってしまうのだろう。

真純は廊下に座り込んだまま、子供のように声を上げて泣き続けた。

絶対、猫が好き！ (13)

シンヤが出て行って、一週間が過ぎた。

真純を攫った男は、あれから二度と姿を見ていない。シンヤに手出しをするのは、懲りたのだろう。

シンヤからも、何の音沙汰もない。ハッカーを止めたのか、未だに続けているのか定かではない。

真純は新しいユーザIDとパスワードを発行してもらい、これまで通りに辺奈商事と家を往復していた。

大声で泣いてスツキリしたせいか、翌日には案外吹っ切れていた。時々シンヤの事を思い出す事はあるが、瑞希を恨んだりする気持ちは湧いてこなかった。

ただ、たった三日しかいなかったのに、シンヤがいないというだけで、家の中がやけに広く冷たく感じる。いっそ本物の犬を飼おうか、と考えた。

いつものカフェで犬を飼ってもいいかと切り出すと、瑞希は眉をひそめた。

「また得体の知れない男を拾ったの？」

「違うよ。本物の犬。庭じゃなくて家の中で飼いたいから、大家さんにお伺いを立ててるんだけど」

瑞希は安心したように笑った。

「いいわよ。どんな犬を飼うの？」

「まだ決めてないけど、大きい犬がいいな」

「小さいのにしときなさいよ。あんたが小さいから散歩の時に引きずられるわよ」

「それは駄ければ大丈夫なんじゃないの？ 盲導犬って結構大きいけど、引きずらないよね」

「犬を飼った事ないあんに、ちゃんと躰けられるかは疑問だね」

「うーん」

確かにそれは不安でもある。うまく躰けられなくて、大きい犬が言う事を聞かなかったら、手に負えないような気がする。

真純が考え込んでいると、瑞希は小さくため息をついた。

「あんたの好きなようにしていいわ。寂しいんでしょ？ シンヤくんって大型犬だものね」

「なんでシンヤが大きい事知ってるの？」

シンヤの容姿については、瑞希に話した覚えがない。

途端に瑞希は焦った様子で、しどろもどろに言い訳を始めた。

「あ、ほら、あの事件の時、彼の事色々調べたから」

調べたのはハッカーの”シンヤ”の事だったはずだ。

真純が探るように見つめると、瑞希はそそくさと席を立った。

「じゃあ私、忙しいから、もう行くわね。犬の事は雑誌でも見て検討してからの方がいいわよ」

引きつったような笑みを浮かべて、瑞希はカフェを出て行った。

カフェを出た後真純は、瑞希の助言に従って本屋に立ち寄り、犬の飼い方などが書かれた雑誌を買って家に帰った。

もう少しで家にたどり着くという時、真純はドキリとして立ち止まった。

家の門の前に、大きな人影がうずくまっている。見覚えのあるその姿に、真純の鼓動は一気に高鳴る。

夢中で駆け寄り、頭の上から声をかけた。

「何してんの？」

うずくまっていた大型犬は、真純を見上げて、人懐こい笑顔を見せた。

「どうしても忘れられないから、もう一度拾ってもらおうと思って」真純は黙って見つめ返した。

懐かしい笑顔に、熱いものがこみ上げてくる。けれど素直に喜べ

ずにいた。

やっと吹っ切れたと思ったのに。もう一度拾う事など、出来るわけがないのに。どうしてまたやって来たのだろう。そう思うと、腹立たしさもこみ上げてくる。

シンヤは立ち上がり、営業口調で話し始めた。

「わたくし、怪しい野良犬ではございません。こういう者です」

そう言って、俯く真純の目の前に、一枚の名刺を差し出した。名刺に視線を移し、真純は目を見開く。

見慣れた会社名とロゴマーク。見慣れた部署名。

株式会社 辺奈商事

情報システム部 システム開発課

舞坂 進弥

名刺を受け取った真純は、思わず声を上げた。

「シンヤって本名もシンヤなの？」

「ええ?! 食いつくところは、そこなの？」

不満げな声に顔を上げると、目が合ったシンヤはニッコリ笑った。

「僕、真純さんの同僚になったんだよ。よろしくね、先輩」

今日は犬かぶりのシンヤのようだ。

「よく入れたね」

「うん。正面から人事を通したら、十中八九書類で落とされるだろうから、ちよっと裏技使っちゃった」

シンヤは真純から聞いていた、瑞希の所属部署と役職を頼りに、辺奈商事に電話して、直接中途採用の交渉をしたという。

書類上では実務経験一年未満の新人プログラマだが、シンヤの正体を知っている瑞希は、その技術力も知っている。そこに賭けてみたのだ。

「敵に回すより取り込んだ方が得だ、とか言っただけ脅したりしてないよね？」

「そんな事はしてないけど、むこうにそういう思惑はあったかもしれないね」

そしてシンヤは、瑞希の口調を真似て言う。

「ネットワーク管理者とかやってみなあーい？ ハルコとタッグを組んだら最強になるわよお、って言ってたから」

最凶の間違いじゃないだろうか。両者ともハッキングの前科者だ。瑞希が挙動不審だった理由が分かった。面接でシンヤに会っていたからだ。

「あれ？ 真純さん、犬を飼い始めたの？」

真純が小脇に抱えた雑誌を見て、シンヤが尋ねた。

「ううん。飼おうかなと思って下調べ」

途端にシンヤは、不愉快そうに眉を寄せる。

「犬なら僕で間に合ってるでしょ。飼うなら猫にしようよ」

「なんで？ おまえ、犬嫌いななの？」

「嫌いじゃないけど、僕は絶対、猫が好き。昔実家で飼ってたんだけど、いつもは素っ気ないのに、たまに甘えてひざに乗ってきたりするのがいんだよね。散歩に連れて行かなくてもいいし」

「おまえ早起きできないから、散歩に行きたくないだけでしょ」

真純の指摘に、シンヤは絶句する。だが、ふと気付いたようにつぶやいた。

「あ、でも、猫は真純さんで間に合ってるか……」

そしてニッコリ笑うと、勝手に結論を下した。

「じゃあ、何も飼わなくていいよ」

その、さりげない強引さに少しムツとして、真純はシンヤを睨む。「なんでおまえが決めるの。私、まだおまえを拾ってないんだけど」

「え……拾ってくれないの？」

捨てられた子犬のように、継るような目で見つめられ、真純はあつさり陥落する。

「別に……拾ってもいいけど……」

シンヤは満面の笑顔で、軽く拳を握った。

「やったっ！」

シンヤは笑顔のままジーンズのポケットに手を突っ込み、何かを探り始めた。

そして――。

「今度はちゃんと用意してきたから、いつでもOKだよ」

そう言って、探り出した避妊具を、水戸黄門の印籠よろしく、真純の目の前に突き出した。

フェアリー候補の真純は、その実物を目にするのは初めてだった。

物珍しさが先立って、まじまじと見つめていると、頭の上から低い声が降ってきた。

「なんなら、今からでもいいけど？」

ハッとして見上げると、黒シンヤが口元にうっすらと笑みを浮かべて、見下ろしていた。

真純は無言で、門を開け中に入る。そして、ついて来ようとしたシンヤの目の前で、門を閉じた。

「ちよっ……！　なんで？」

シンヤは門扉の上を両手で掴み、身を乗り出すようにして抗議する。

シンヤを睨んで、真純は冷たく言い放った。

「やっぱりおまえが一番危険だ。家に入れるわけにはいかない。警戒しろって言ったのおまえだし」

「冗談だってば」

冗談にしては、用意周到すぎる。

再び犬かぶりに戻ったシンヤが、情けない声を出した。

「僕、来週までに住所を固定しろって言われてるんだよ」

「何？　おまえ、ここに定住するつもりなの？」

「ダメ？」

門扉の上に両手をかけて、身を乗り出したシンヤが、小首を傾げる。その姿があまりにも犬っぽくて、真純は思わず吹き出した。

この大型犬を飼う事は、瑞希もあらかじめ承知していただろう。真純は笑いながら門を開き、シンヤを招き入れた。

「おかえり」

「ただいま!」

シンヤは嬉しそうに笑いながら、元気よく返事をして門をくぐった。

(第1部 完)

お・は・よ（前書き）

第1部終了後、翌朝の話です。

お・は・よ

ほんわかした温もりに包まれて、脳がゆっくりと目を覚ます。けれどまだ、目を開きたくはなかった。目覚まし時計が鳴るまでの間、もう少しだけこの幸せな微睡みまどろみの中に浸っていたい。

目を開かなくても分かる朝日の光に背を向け、真純は温もりの中に潜り込んだ。

顔をすり寄せた大きな温もりの壁から、心地よい静かな鼓動が聞こえてくる。

鼓動――？

違和感に気付き、パツチリと目を開く。布団の中、目の前に巨大な壁が横たわっていた。恐る恐る顔を上げると、至近距離でシンヤが目細めた。

「おはよ」

一気に眠気が吹っ飛んだ。同じ布団の中で、シンヤに抱かれて気持ちよく眠っていたらしい。

「なんで――っ?!」

慌てて手も足も突っ張って離れようとする、ベッドから落ちそうになったシンヤが逆にしがみついていた。

「うわっ！ そっちこそ、なんで?!」

腕を突っ張ったまま、真純はシンヤを凝視する。どうして一緒に寝ているのか、全く記憶にない。

再び同居する事になったシンヤの就職祝いで、ゆうべ一緒に飲んだのは覚えている。だが、いつ、お開きになったのか、そもそも、どれだけ飲んだのか覚えていない。

当然、いつの間にベッドに入ったのかも。パジャマに着替えているのが、更に不安でしょうがない。シンヤは飲んでいた時と同じ格好だが。

シンヤがしがみついていた手を緩めて、小さくため息をついた。

「やっぱ、記憶飛んでるんだ。かなり飲んだもんね」

「……私、そんなに飲んだの？」

「おまえ弱いから飲むなって、僕の分まで注ぐ端から取り上げて飲んでたよ」

「う……」

酷い酔っぱらいだ。

今まで記憶が飛んだ事など、一度もない。シンヤが戻って来た事に浮かれて、調子に乗りすぎたらしい。

「ごめん。ここまで運んでくれたの？」

「ううん。真純さんが自分でここまで来たよ」

途端に不愉快になり、真純はシンヤを睨む。

「じゃあ、どうして一緒に寝てるの？」

シンヤもムツとした表情で、真純を睨み返した。

「自分が引きずり込んだんだろ？」

「え……」

あり得ない。

正気だったら絶対にあり得ない、自分の暴挙に呆れて真純は絶句する。

シンヤは表情を緩めて、再びため息をついた。

「本当に全然、覚えてないんだね」

そして記憶にない、ゆうべの経緯を覚えてくれた。

さすがに飲み過ぎだと判断したシンヤに促され、真純は自分で部屋に戻った。そして自分でパジャマに着替え、部屋を出て行くとするシンヤを、一緒に寝てくれと布団に引きずり込んだらしい。

あまりの醜態に、顔から火を噴きそうな気がして真純は俯いた。

「いきなり目の前で脱ぎ始めるし、焦ったよ」

「え……」

パジャマの下はパンツ一枚だ。確かにいつも寝る時はそうだが、着ていたものは全部脱ぎ捨てたらしい。しかもシンヤの目の前で。

真純は少し顔を上げて、上目遣いにシンヤを窺った。

「見たの？」

「見てない見てない」

シンヤは笑いながら手を振って、軽く否定する。その笑顔がウソ臭い。

探るようにじっと見つめていると、シンヤはヘラリと笑って白状した。

「いやあ、真純さんって身体もちっちゃいけど、おっぱいもちっちゃいなあーって」

「やっぱり見たんじゃない！」

「見せられたんだよ」

平然と言い返すシンヤが小憎たらしくて、叩こうと手を振り上げると、その手首を掴まれた。

シンヤは余裕の笑みを浮かべて、真純に問いかける。

「その元気なら大丈夫そうだね。気分悪いとか、頭痛いとかない？」
優しい言葉にすっかり毒気を抜かれて、真純は小さく頷く。

「うん。ちょっと眠いだけ」

「そっか。ホント酒強いね」

そう言って一層細められたシンヤの目に、邪な光が宿ったように見えた。

――黒シンヤ降臨？

ドキリとして身構えようとした時には、すでに遅かった。掴まれた手首をベッドに押さえつけられ、あっという間に上向きにされた身体の上に、シンヤがのしかかってきた。

真純を見下ろすシンヤの表情は、明らかに黒シンヤだ。

「おまえ、さっきまでかぶってた犬は？」

「朝の散歩に出かけたよ」

「すぐに連れ戻してきなさい！」

「やだ」

空いた手で肩を押さえて押し戻そうとするが、真純の抵抗なども

のともせずにシンヤは距離を詰めてくる。

目の前まで迫ったシンヤが、静かに言った。

「本当はゆうべの内について思ってたんだけどね。真純ってガードが堅いから、お酒飲んでリラックスした時ならイケるかなって。まさか、あんなに飲むとは思ってなかったから」

ゆうべから企んでいたとは、黒シンヤ侮り難し。という事は、拾ってくれたお札とか言って、ワインを一本くれたのも作戦の内だったのか。

泥酔どころか酩酊状態だったから、危険を回避できたようだ。

ん？ てことは――。

「一緒に寝ただけなの？」

「うん。ベッドに入った途端、真純眠っちゃったし。多分覚えてないんだろうなって思ったし」

いつの間にか完全に覆い被さっていたシンヤが、真純の頭を抱きかかえるようにして目を細める。

「やっぱり初めての時は覚えてて欲しいしね」

真純はドキリとして問い返した。

「なんで初めてだってわかったの？」

匂いでもするんだろうか？ シンヤは少し不思議そうな顔をした。

「え？ だってオレ、真純とはまだキスしか……あれ？」

シンヤが眉を寄せて首をひねる。

「しまった」と思った。いざれ分かる事とはいえ、フェアリー候補である事を、自ら暴露してしまったようだ。

いやいや、いざれって何だ、いざれって、と自分にツツコミを入れてみると、シンヤも気付いたらしく、笑顔で問いかけてきた。

「もしかして真純って、オレが初めて？」

どう言えいいのか、返答に困る。三十も近いというのに未だフェアリー候補とは、二十歳の若造からしてみれば、呆れるような事実ではないだろうか。

実はキスも初めてでしたとは、とてもじゃないが言えない。しか

し黙っていても、いずれはバレてしまうだろう。だから、いずれって……！

目を逸らして悶々と考えていると、耳元で低い声が聞こえた。

「黙ってると手加減しないよ」

咄嗟に声のした方へ顔を向ける。目の前でシンヤが、意地悪な笑みを浮かべ、首筋に手を滑らせた。

真純は思わず首をすくめる。そんな事にはお構いなしに、パジャマの中に侵入した手は、鎖骨を撫でて肩を掴んだ。

撫でられたのは首筋と鎖骨なのに、背中の真ん中から太股の裏側辺りまで、ゾクリと妙な感覚が走り、真純は大声で叫んだ。

「は、初めてだから！」

シンヤは手を離し、嬉しそうな顔で真純を抱きしめた。

「やっぱりそうなんだ。反応も超かわいい」

小馬鹿にされているような印象は否めないが、てっきり呆れられると思っていたので、この反応は意外だった。

「じゃあ、今から記念すべき初めてを体験するんだね」

「い、今から?!」

慌てて逃れようとするが、ガッチリ抱きしめられていて身動きが取れない。

すでに日は昇り、カーテンは引いてあるものの、部屋が妙に明るいのも落ち着かない。

記念すべきと言うからには、もう少しシチュエーションを考えてくれても、と変に冷静に考えている間に、シンヤの顔が近付いて来た。

「だって、一晩中生殺しな目に遭って、オレもう我慢限界。ごめん。手加減無理かも」

「ええ?!」

ウソつき! と言う前に唇を塞がれた。

いきなり激しく深く口づけられ、真純の身体は次第に熱を帯びていく。おまけにシンヤの温もりと重みは、なんだか心地よかった。

酸欠と熱で意識がぼんやりとし始め、真純の身体から力が抜けていくと、肩を掴んでいたシンヤの手がパジャマのボタンにかかった。その時、枕元の目覚まし時計が、けたたましいアラームを鳴り響かせた。シンヤは唇を離し、ピタリと動きを止める。

真純は荒い息を吐きながら、鳴り続けるアラームをぼんやりと聴いていた。

「あーっ、もう！」

突然シンヤが苛々したようにわめきながら、叩くようにしてアラームを止めた。そしてそのまま身体を離し、隣にごろんと仰向けに転がる。

重しがなくなったので、真純は身体を起こした。

目覚まし時計が鳴っただけで、あっさりと退いたシンヤが意外で、じっと見つめる。

シンヤはふてくされた表情で、吐き捨てるように言った。

「これからって時に、タイムアップかよ」

「タイムアップ？」

「真純のタイムスケジュールを狂わせたら、ごはん抜きなんだろう？
それはイヤだし」

相変わらず妙なところで律儀なシンヤに、真純は思わず吹き出した。

「笑わなくてもいいじゃん」

不愉快そうに顔を背けて、シンヤは口をとがらせる。

少ししてシンヤは、大きく息を吐き出しながら身体を起こした。

「ま、いっか。ゆうべ真純さんの本音が聞けたし」

「真純さん」に戻っている。どうやら散歩に行っていた犬が、帰ってきたらしい。

それはさておき、ゆうべという事は、まだなにか恥ずかしい事をやらかしていたのだろうか。

「本音って何？」

ドキドキしながら尋ねると、シンヤはイタズラっぽく笑った。

「僕がいない間、寂しかったんでしょ？」

含みのある言い方に、何を言ったんだか全く記憶にない真純は、益々動揺する。

「別に、そんな事……」

しどろもどろに否定すると、シンヤはからかうような笑顔で顔を覗き込んだ。

「またまたあ、素直じゃないよね。酔った時は素直なのにさ」

動揺は不安に変わり、真純はシンヤに詰め寄る。

「もったいぶらずに教えてよ！ 私、何を言ったの？」

「僕が部屋を出て行こうとした時、どこにも行かないで、ずっと側にいてって、半泣きで縋り付いてきたんだよ」

恥ずかしすぎる！

あまりの恥ずかしさに、再び顔から火を噴きそうになっていると、シンヤにフワリと抱きしめられた。

「大丈夫だよ。もうどこにも行かない。ずっと側にいるから」

シンヤの腕の温もりに、テンパっていた心が次第に静まっていく。

「……うん」

小さく頷いて、真純はぎこちなくシンヤの背中に腕を回した。

シンヤはクスリと笑い、ギュッと真純を抱きしめた。

(完)

ナイショの気持ち

—— どこにも行かないで。ずっと側にいて ——

酔って記憶が飛んでいる時に、シンヤに言ったらしい。

シンヤはなんだか嬉しそうだったが、弱みを握られたようで少し悔しい。

きつとシンヤが言ったように、本音だったのだろう。だがそれは、口に出すほど明確な欲求があったわけではない。

そんな事を無意識の状態で口走った事を聞いた時は、ただ恥ずかしいばかりだった。

しばらくして冷静になった時、恥ずかしいとか照れくさいよりも、自分の中にそんな恋に溺れる乙女のような感情があった事に驚いた。溺れてはいないと思っている。シンヤの事は好きだが、四六時中シンヤの事を考えているわけではない。きちんと今まで通りの日常を繰り返し、今まではひとりだった朝と夜にシンヤと一緒にいるというだけの違いだ。

少し前からシンヤは、辺奈商事に通勤するようになった。そのため当初約束していた掃除は、休日にかしてもらえなくなった。それはそれで、かまわない。

代わりに真純が、平日は今まで通り、軽く掃除する事にした。

朝シンヤを送り出して、仕事をしたり掃除をしたり、そうやって動いている時は、今までと全く変わらない。

ただ合間にホッとひと息ついた時、ふと家が広く冷たく感じてしまう。ちやうどシンヤが出て行ったあの時のように。

そして明確な言葉を伴った、あのわがままな欲求が、不意に頭をもたげる。

—— どこにも行かないで。ずっと側にいて ——

納得のいかない状態で、シンヤを失ったあの寂しさが、もう心配いらないのだと分かっている、シンヤの姿が見えなくなるたびに、繰り返す。

そう考えると、やっぱり溺れているのかもしれない。

いい年して八つも年下の子に、と思わなくもない。

そんな真純の心中を知ってか知らずか、シンヤは毎日きっちり定時に仕事を終えて帰ってくる。

具体的な内容はさっぱり分からないが、システムの仕事が忙しい事は知っている。毎日定時に上がって、ちゃんと仕事が出来ているのか心配だったので、瑞希に尋ねたら問題ないと言われた。

仕事に支障を来していないのなら、シンヤが早く帰ってくるのは素直に嬉しかった。これはシンヤには内緒だ。

毎日定時で上がるシンヤも、さすがに今日は夜中まで帰ってこないかもしれない。課でシンヤの歓迎会があるからだ。

真純にも出欠確認のメールは来ていた。しかし以前ならともかく、今は瑞希以外のメンバーとは交流がない。おまけに半ばケンカするようにして在宅勤務に移行したので、顔を合わせ辛かったりもする。そのため真純は欠席した。

主賓のシンヤは欠席するわけにはいかなかったので、真純の欠席を残念がっていたが、酔ったシンヤにまわりつかれて、自分のいない課内で妙な噂がおもしろ半分に囁かれるのは、是非とも回避したい。ひとりで夕食を摂り、風呂を済ませ、明日の朝ご飯のタイマーもセットして、他にすることは何もなくなくなった。

金曜日の夜だ。シンヤは今頃、羽目を外した先輩たちに、散々飲まされたりしているのだろう。

うっかりシンヤの事を考えてしまい、少し寂しくなった真純は、景気づけにひとり飲み会をすべく、缶ビール二本とタバコを持って、リビング前のテラスに出た。

板張りのテラスに座り、隅に置いてあった灰皿を、自分の横に引き寄せる。吸わない人の前では吸わない事になっているので、タバコを吸わないシンヤがやってきてから、格段に本数が減った。値上がりした事だし、いっそやめてしまおうかと考える事もある。

煙を吐きながら見上げると、晩秋の夜空に半分だけ欠けた月が、明るく輝いていた。

明日の予定をぼんやりと考えながら、ビールを飲みつつタバコを吹かす。

しばらくそうしていると、背後でサッシの開く音がした。

「ここに、いたんだ」

振り返ると、今帰ってきたばかりらしいシンヤが立っていた。

スーツ姿のシンヤは、少しだけ大人っぽく見える。最初見た時は、違和感有り有りだったが、毎日見ているうちに、案外見慣れてきた。シンヤはニコニコしながらテラスに出てきて、背中から真純を抱きしめた。

「真純さん、ただいま」

いきなり抱きつかれるのも日常茶飯事となり、真純も最早うろたえたりはしない。けれど、やっぱりドキドキする事は、シンヤには内緒だった。

「早かったね。二次会に行かなかったの？」

「うん。飲み直すなら真純さんの方がいいもん」

「主賓なのに、よく解放してもらえたね」

「家で彼女が待ってるからって言ったら許してもらえたよ」

「え……」

彼女って誰だと追及されて、余計な事を言っていないだろうかと思

し不安になる。尋ねると、瑞希がそう言って帰らせてくれたらしいのでホッとした。

シンヤは隣に座り、ネクタイを緩めながら、側に置かれた缶ビールを指差した。

「これ、少しもらっていい？」

相変わずいちいち断るシンヤに、思わず苦笑する。

「いいけど。もうほとんど空だよ。もう一本持ってくるから」

立ち上がろうとすると、腕を掴まれた。

「あ、わざわざいいよ。真純さんが飲みたいならかまわないけど」

「私はもういい」

「じゃあ、残りは僕がもうね」

そう言ってシンヤは、少しだけ残ったビールを一気に飲み干した。空になった缶を横に置き、シンヤは再び真純を抱きしめる。

「どうしたの？」

努めて平静を装いつつ問いかける。シンヤは目を細めて囁いた。

「残り物の風味だけでも、おすそ分けしようと思って」

黒シンヤだ。気付いた時には、唇を塞がれていた。

シンヤのキスはいつも断りがなく、唐突で強引だ。そのくせ酷く優しく、とろけるように甘い。

ビールを飲むのに断らなくていいから、こっちは断りを入れて欲しいと思う。けれど実際断りを入れられたら、照れくさくて逃げ出してしまおうだろう。

計算高い黒シンヤは、それを知っているから唐突なのかもしれない。

もう何度目だか分からなくなったキスだけど、やっぱりドキドキして照れくさい。なのにこの瞬間だけは、目を閉じていてもシンヤが側にいる事は認識できる。だからなのか、あの寂しさと不安が忘れられる。

そんなシンヤのキスは、結構好きだ。これも絶対、シンヤには内緒だった。

(完)

それでも、猫が好き！ (1)

きっかけは本当に些細な事だった。

真純の心があんなにも傷ついていたなど、進弥は全く気付いていなかった。

なにしろ自分自身は、真純との永遠の別れなど、微塵も考えてはいなかったから――。

通勤途中にバスの中から眺める、河川敷の桜並木が、ほんの少し色付いてきた。この並木は進弥と一緒に暮らしている、真純の家の近所まで続いている。

帰りに少し足を伸ばして、もっとよく様子を見てみようと思った。進弥が再就職を果たして半年が経過した。

会社勤めにも仕事にも慣れ、規則正しい生活――早起き――も苦にならなくなってきた。

真純と暮らし始めても、半年経った事になる。

想いも伝え合い、恋人同士の甘い同棲生活――のつもりだったが、何かが違う。

家賃も食費や光熱費も支払っているの、半年前に転がり込んだ時のような居候ではないが、ルームシェアをしているただの同居人という印象は否めない。

元々真純が住んでいた家のせいか、家内の主導権は真純が握っている。

ということは、相変わらず、御主人様と飼い犬というところだろうか？

抱きしめたりキスをしたりは、拒まれなくなった。だが半年経つというのに、一つ屋根の下に二人きりで住んでいるというのに、それ以上は何もないのだ。

真純は益々ガードが堅くなったような気がする。

改めて同居を開始した初日、真純は記憶をなくすほど泥酔した。それがよほど恥ずかしかったのか、以来彼女は決して深酒をしない。おまけに夜は、ちよつと目を離れた隙に自室に引っ込んで、あろう事か施錠してしまうのだ。

これでは手も足も出ない。

なぜこんな事になっているかというところ、進弥の失敗が原因だった。その日、翌日の休日出勤を真純に伝えるのを忘れていて、それを真夜中に思い出した。休日前なので真純も起きているのではないかと思い、部屋の扉をノックした。

返事はなく、扉を開けると灯りは消えていて、真純はベッドの上に半分身体を起こして、不機嫌そうに睨んでいた。

用件を伝えると、本当はよからぬ事を企んでいたのではないかと勘繰られた。

本来の目的はそうではない。しかし全く下心がなかったわけでもない。

期待に応えようとすると、寝入り端を邪魔された真純は、すこぶるご機嫌斜めで、激しく拒絶された。

その日以来真純は、寝る前に部屋に鍵をかけるようになった。

自分で蒔いた種とはいえ、カノジョに警戒されているカレシってどうよ？　と思わなくもない。

理由を尋ねると、寝付きが悪いので睡眠の邪魔をされたたかないからだという。他意はないと。

時間の管理に厳しい真純の事だから、多分本当なのだろう。

クールな真純は、自分から甘えてくる事は、まずない。年上である事を主張する真純にとって、年下の進弥に甘える事は恥ずかしいのだろう。

真純が甘えたのは、後にも先にも泥酔したあの時だけだ。

あれが真純の本音だと分かった。素直に嬉しかった。

もう一度真純に甘えて欲しくて、時々酒を勧めてみるが、酒に強い真純は少々の上では酔いもせず、付き合っていると進弥の方が先につぶれてしまうのは明白なので諦めた。

そういう雰囲気にもならないので、きっかけもつかめないまま、清らかな関係が続いている。

相変わらず、子供扱いされているような気もする。

心は捕まえたと思っていた。けれどそう思っているのは自分だけかも知れないと、進弥は時々不安になっていた。

「ンまーっ！ あんた、まだフェアリー候補なの？ 何やってたのよ、半年も」

辺奈商事本社ビル二階のカフェで、瑞希が頭の天辺から声を上げた。

いつものように書類の交換にやってきたところ「シンヤくんとは最近どう？」とニコニコ笑いながら問いかけられた。

どうもこうも以前と変わらない、と正直に答えた反応がこれだった。

瑞希はテーブルの上に片手で頬杖をつきながら、呆れたように横目で真純を見つめた。

「あんた、本気でフェアリーを目指してるわけじゃないでしょうね？」

「そんなつもりはないけど、別にシンヤもそんな素振りは見せないし……」

実は二回ほど危なかった事は黙っておく。

瑞希は意外そうに目を見開いた。

「あら、シンヤくんって草食なの？」

「……違うと思うけど」

避妊具持参で来た奴が、草食なわけがない。

ぼんやり考えていると、突然瑞希がテーブルをピシヤリと叩いた。ビクリとして飲んでいたコーヒーが気道に入りそうになる。

「だったらシンヤくんがかわいそうでしょ？ あんた、お肌だけはきれいなんだから、出し惜しみするんじゃないわよ」

”だけは”って何だ、”だけは”って！

何気に失礼な瑞希の言葉に、そういえばシンヤが、ほっぺが柔らかくて気持ちいいと言っていた事を思い出す。

瑞希は身を乗り出すようにして、興味深そうに問いかけた。

「それらしい素振りは見せないって、シンヤくん本当に何もしないの？」

「抱きついたりはするけど、犬がじゃれついてるみたいなものだし」「バカね。そんな時”あんっ”って、ちよつとかわいい声出してみなさいよ。そうすりゃ乗ってくるわよ」

「え……」

思わず顔が引きつる。絶対、自分のキャラじゃない。かえってシンヤも引きそうな気がする。

「……瑞希はそうやって男を誘うの？」

途端に瑞希は、不愉快そうに眉をひそめた。

「仕事に忙殺されてて、ここ二、三年、男なんてご無沙汰してるわよ」

美人で社交的な瑞希は、学生時代からカレシがいなかった事がないので、意外だった。

「社内にくらでもいるじゃん」

真純が指摘すると、瑞希は目を伏せて、目の前で手を振った。

「社内の男なんてダメよ。私の後ろしか見てないし。逆玉狙いで妙に媚びた奴か、恐れてビクついてるか、どっちかだもの。金も権力もある才色兼備って損よね」

そう言って、わざとらしく大きなため息をついた。

自分で言うか！

心中でツッコミを入れてみると、再び瑞希がテーブルを叩いた。「とにかく！ あんたも呑気に構えて、いつまでももったいぶっていると、シンヤくんを横からかつ攫われるわよ」

「誰に？」

すかさず尋ねる。

瑞希は意味ありげに、意地悪な笑みを浮かべた。

「彼ね、社内じゃ結構人気あるのよ。バレンタインにも何人かにチョコ貰ってたし。全員年上ってのが笑えるけど」

シンヤは会社でも犬をかぶっているのだろう。

穏和で人懐こくて甘え上手な犬かぶりシンヤが、年上受けするのは頷ける。真純も犬かぶりシンヤには、案外ほだされて、うっかり甘やかしてしまうのだ。

しかし辺奈商事では、数年前から義理チョコは禁止されている。

禁止令が発令された時、朝礼で「チョコを渡すからには何をされてもいいという覚悟の上で渡すように」と注意した上司がいて、しばらくの間、全社で話題になった。

という事は、シンヤは覚悟のチョコを貰った事になる。そんな話は初耳だ。

真純の動揺を察した瑞希が、ため息と共にクスリと笑った。

「大丈夫よ。シンヤくんも義理が禁止だって事は知ってるから、全部丁重にお断りしてたわよ」

それでチョコを持って帰ったりはしなかったわけだ。納得してホッと息をつく。

瑞希は仕事に戻ると言って席を立った。そして冷ややかに真純を見下ろす。

「あんたね、そんな顔するくらいなら、もう少し彼の気持ちも考えてあげなさいよ」

そう言い残して、瑞希はカフェを出て行った。真純もカフェを出て家路につく。

瑞希の言葉が頭から離れず、なんだか胸がモヤモヤした。

別に出し惜しみしているわけでも、もったいぶっているわけでもないが、一線を越える事にこだわる必要もないんじゃないかと思う。でも部屋に鍵をかけるのは、やめようかなと思った。シンヤも気にしていた。

シンヤにも説明した通り、寝付きが悪いので途中で目が覚めたらもう一度寝入るまでかなりの時間がかかるのだ。そして翌日に支障が出るのは困る。本当に他意はない。

シンヤの気持ちを考えてないわけではない。けれどそれを考えるたびに、ちよつと不安になる。

社内でも人気者のようだが、シンヤなら、もっと若くて素直でかわいいう女の子が、周りにいくらでもいるんじゃないだろうか。どうして自分なのだろう——と。

夕方、夕食の支度をしていると、いつもよりハイテンションなシンヤの声が玄関に響いた。

「真純さん、ただいまーっ！」

その勢いのままシンヤは、廊下をバタバタと走ってくる。大型犬のシンヤは足音もうるさい。

床が抜ける！ と注意するため台所から出てきたところを、いきなり抱きしめられた。

興奮したように、シンヤが言う。

「桜！ 桜咲いてたよ！ 週末にお花見に行こうよ」

嬉しそうな声に、言おうとしていた文句も不機嫌も、一気に吹き飛んだ。

やっぱりシンヤの笑顔と温もりは、心を落ち着かせる効果がある。自然に頬が緩む。

「うん。行こう」

真純は答えて、シンヤを抱きしめ返した。

それでも、猫が好き！ (2)

「真純さんって会社で恐れられてるの？」

夕食後一緒にテレビを見ながら、シンヤが問いかけた。

なぜ唐突にそんな事を聞くのか不思議に思い、真純は問い返した。

「さあ……。なんで？」

「高木リーダーが、怖くないのかって聞いてたから」

「ああ、高木くんには恐れられてるかもね」

高木は真純よりも二つ年下で、プロジェクトのチームリーダーを任せられる立場にありながら、遅刻の常習者だ。真純が知る限り、午前十時より前に来た事がない。

高木チームのデータ入力を担当した時、彼の遅刻のせいで何度となくぼんやりさせられたので、その度にうるさく説教したのだ。

瑞希にも注意は受けていたはずだが、それでも改善される事はなかった。ある意味強者だ。

ただ瑞希が言うには、研修や取引先との打ち合わせなどには、遅刻した事がないらしい。ちゃっかりしている。

そしてその事実が、真純にとっては我慢ならなかった。

会社や自分にとってダメージになる事にはきちんと対応するが、真純が相手だとずぼらになる。

確かに毎回同じ説教を食らうだけで、高木の腹は痛まない。自分の仕事が軽く見られている事に腹が立って、在宅勤務に移行したのだ。

真純の他にも在宅でデータ入力のアルバイトをしている者がいるので、特に問題はなかった。

もっともアルバイトと正社員の真純とでは、入力しているデータの機密性は雲泥の差があるのだが。

そんな経緯があるので、高木と真純は犬猿の仲だった。最初は冷静に注意していたが、繰り返される度に声を荒げ、終いには怒鳴りつけていたので、恐れられているのも頷ける。

だが、どうして今頃、シンヤとそんな話をしたのか気になった。尋ねるとシンヤは、全く悪びれた様子もなく、とんでもない事をサラリと口にした。

「僕の彼女が真純さんだって言ったら、聞かれたんだよ」

目の前が真っ暗になったような気がした。益々会社———というか、情報システム部が遠退いたような気がする。

呆然とする真純に、シンヤはそんな事になった経緯を説明した。

シンヤの歓迎会に来た者は、シンヤに彼女がいる事を知っていた。ところが高木は、その時たまたま出張中で、参加していなかったらしい。

事情を知らない高木が、シンヤに合コンを持ちかけてきた。シンヤが事情を話して断ると、高木の興味はシンヤの彼女に向けられた。どんな子なんだとしつこく聞かれ、答えたという。

よりにもよって高木に、暴露する事はないではないか。

「なんでそんな話すの？」

「なんでって……。別にうちの会社、社内恋愛禁止じゃないよね？」
確かに社内恋愛も結婚も禁止されてはいない。だが発覚すれば、どちらか一方が他部署に異動となる。

公然とイチヤイチヤされては、周囲の者の仕事に支障を来すからだ。だから皆、結婚は隠しようがないが、付き合っている事は隠したがる。

もっとも本人たちは隠しているつもりでも、桃色のラブラブオーラは案外だだ漏れなもので、大概周囲に感付かれている。上司も目に余るほどイチヤイチヤしていない限り、黙認しているのが現状だ。公私混同するなという、牽制を込めた規則なのだろう。

真純とシンヤは同じ部署に所属しているが、元々就業場所は別々なので、この規則に関しては、何の障害にもならない。しかし——。

「課のみんなに知れ渡ったら恥ずかしいじゃない」

真純が吐き捨てるように言うと、シンヤが途端に真顔になり、黙って真純を見つめた。

突然、テレビのバラエティ番組から笑い声が響いた。シンヤは眉をひそめ、素早くリモコンを取り、苛々したようにテレビを切る。

そして静かに問いかけた。

「真純はオレと付き合ってる事が恥ずかしいの？」

感情を押し殺した冷たい目と低い声に、若干畏縮しながら真純は答える。

「恥ずかしいよ」

ヒステリーババアが八歳も年下の男と付き合っている。高木が笑いながら噂しているのを想像すると、いたたまれない。

シンヤは少し目を細め、自嘲気味に笑った。

「ふーん。やっぱりオレの勘違いだったんだね。わかったよ」

「何の事？」

意味が分からずに尋ねると、シンヤは目を逸らした。

「好きだって言われたから、オレと同じだと思ってたのに、真純は違うんだ」

相変わらず意味が分からない。シンヤが何を憤っているのか。

憤っているのは、むしろこちらの方だ。確かに会社で余計な事を言うなどとは言っていなかったが、からかわれる事は目に見えているのに、何も考えなかったのだろうか。

すねた子供のように、シンヤは更に言い募る。

「オレは真純にとって、今も拾った子犬なんだね。だから部屋に鍵をかけるんだろ？」

「それは前にも話したじゃない」

「飼う犬に咬まれたくないからだろ？」

「なんでそれにこだわるの？」

真純は怒鳴ってシンヤを睨んだ。話がなさっての方に飛躍し始めている。

少しの間黙って睨み合った後、シンヤが再び口を開いた。

「飼い犬じゃなくて恋人なら、なんで嫌がるんだよ」

ちゃんと説明して、納得してもらったと思っていた。ウソなどついていない。なのにシンヤは、施錠を拒絶だと受け取っていたのだ。嫌がつてなどいいない。いつかは受け入れるつもりでいた。ただきっかけがないまま、半年過ぎていただけだ。

鍵をかけるのを止めようとしていた矢先に、そこを突かれて無性に苛つく。

その気持ちのままに、思ってもいない言葉が口をついて出た。

「そういう事がしたいんなら、そういう女のところに行けば？」

一瞬目を見開いて、シンヤは顔を歪めると、勢いよく席を立った。

「もういい！」

そう言い捨てて、足音も荒く二階に消えて行った。

大きくため息をついて、真純もゆっくりと立ち上がる。リビングの灯りを消して二階へ上がった時、階段でシンヤと鉢合わせをした。

見ると上着を羽織って、出かけようとしているようだ。

「どこ行くの？」

真純の問いかけに、シンヤは無然として答えた。

「そういう女のどこ」

「は？」

呆氣にとられる真純の横をすり抜けて、シンヤはそのまま外に出ていった。

それでも、猫が好き！ (3)

家を出てきたものの進弥に行く当てはなかった。「そういう女のところ」へも、行くつもりなど毛頭ない。

あのままあそこにいても、真純との言い争いがエスカレートするだけだと思ったからだ。

しばらく時間をおいて、頭を冷やしたかった。

進弥はゆっくりと歩き始めた。

先ほどのやり取りを思い出し、気は重く沈んでくる。

時々思っていた不安が的中した。

真純にとって自分は、恋人ではなかったのだ。なにしろ付き合っている事が恥ずかしい相手なのだ。

それが分かっていても、潔く真純の元を離れる気になれない。

真純がこだわっている年の差なんてどうにも出来ないし、彼女が何を求めているのか見当も付かないのに、どうしても彼女を捕まえたくて堪らなかった。

ぼんやり歩いているうちに、いつの間にか真純と出会ったコンビニの前まで来ていた。時間をつぶすために店内に入る。店内を一巡した後、見るともなしに雑誌をめくりながら、ふと思いつ出した。

週末に花見をしようと約束した、桜並木が近くにある。河川敷の遊歩道に沿って植えられた桜並木は、水場もトイレもない。そのため、ライトアップはされているものの、飲食物持参で腰を据えた花見客はいない。所々ベンチはある。一人きりで頭を冷やすには、ちょうどいいような気がした。

進弥はペットボトルのホットカフェオレを買って、コンビニを出た。

狭い道路を渡り、土手に作られたコンクリートの階段を上って河川敷の遊歩道に出る。

案の定、人気はない。所々に立っている街灯が、桜並木を白く浮き上がらせていた。

灯りの下のベンチを求めて少し歩いた時、進弥はギョツとして立ち止まった。街灯の真下にあるベンチに女の子が座っていたのだ。見た目は高校生くらいだろうか。片方のサンダルを脱いで、ベンチの上に足を上げ、自分の踵を見ていた。

この遊歩道は、通勤通学路にもなっている。先ほどから二台の自転車、進弥の脇を通り過ぎていった。

とはいえ、時刻はすでに九時を回っている。女子高生がひとりで、こんな暗がりにいるのは不審だった。

まさか人じゃない、なんて事はないだろうか。一瞬そんな事を思っ
て、しげしげと眺める。だが、どう見ても生きている人にしか見えない。

少女は踵に手を当てて、目をこすりながら鼻をすすった。泣いている。

進弥が気付いた時には、堪えきれなくなったのか、小さな声を漏らしながら本格的に泣き始めた。

誰もいないと思っているのか、少女の泣き声は次第に大きくなっていく。

イヤなものを見てしまった。進弥は内心舌打ちする。

自分の事に手一杯で、他人を気遣っている余裕などない。面倒はごめんだ。

すぐに別の場所に移動したいのに、進弥は気になって動けずにとた。

しばらくその場に立ち尽くしたまま、少女の様子を窺っていると、通りがかった帰宅途中と思われるサラリーマン風の男が、少女の少し向こうで立ち止まった。

男も少女の様子を訝っているようだ。

会社の花見帰りなのか、少し酔っているようで顔が赤い。

ちやうど街灯のない木の陰に立っている進弥の姿は、男からは見

えていないらしい。

男は少しの間少女の様子を眺め、口元に微かな笑みを浮かべた。その視線は、ベンチの上に投げ出された少女の白い素足を捉えている。

少女の方は自分の世界にどっぷりと浸りきっているようで、自分の後ろで男が立ち止まっている事に気付きもせず、相変わらず泣き続けていた。

男が少女に向かって、一歩踏み出した。

マズイ！

（ああ、放っとけばいいのに！）

後悔と同時に、進弥は少女に向かって小走りに駆け寄っていた。

「悪い！ 遅れてごめん」

笑顔で声をかけると、少女は泣き止み、ポカンとして進弥を見上げた。そんな反応はお構いなしに、少女の隣に腰掛ける。

「ちょっと遅れただけで、そんなに泣く事ないだろう？」

声をかけながらチラリと男の様子を探る。男は進弥を一瞥し、何食わぬ顔でベンチの前を通り過ぎて行った。

どうやら強引に絡んでくるほどには酔っていないようだ。それは進弥としても、ありがたかった。

身体は大きい方だが、決して腕っ節に自信があるわけではない。見ず知らずのうかつな女子高生のために、無用な争いはしたくなかった。

ほどなく男の姿は、並木の外れの闇に紛れていった。それを見送ってホッと息をついた時、隣からさっきまで号泣していた少女が、冷めた調子で声をかけてきた。

「誰？」

自分の置かれていた状況を全く理解していない様子にムツとして、進弥はそっぽを向いたまま言う。

「おまえ、隙ありすぎ」

「何？ ナンパ？」

「誰が。自惚れんな。道端でわあわあ泣いてるようなガキに興味ないし」

「悪かったわね！　じゃあ、何？」

進弥は一つ嘆息し、先ほどの経緯を少女に説明した。事情を知った少女は、意外そうに目を見開く。

「助けてくれたの？」

「不本意ながら」

進弥が憮然として答えると、少女は遠慮がちに礼を述べた。

「ありがとう」

夜遅く外をフラついている不良娘かと思ったら、案外素直だ。意外に思い、少女の方を向く。

彼女は未だにベンチに片足を上げて、しきりに踵を気にしていた。見ると、踵の上の足首の皮がめくれて血が滲んでいる。かなり痛そうだ。

「おまえ、靴擦れが痛くて泣いてたの？」

「違うもん！」

少女は一瞬にして顔を赤らめ、思い切り否定した。よく見ると、足の指にもマメが出来ていて水ぶくれになっている。この状態でもう一度サンダルを履くのは辛いだろう。

「絆創膏とか持っていないのか？」

「うん……」

この少女が帰れないと、自分もひとりで落ち着いて考える事が出来ない。進弥は意を決して立ち上がった。

「ちょっと待ってろ」

そう言い残して、先ほどのコンビニに向かった。

絆創膏を買って、急いで少女の元へ戻る。幸いにも、今度は酔っぱらいに絡まれたりはしていなかった。

礼を述べて絆創膏を受け取った少女は、金額を尋ねてきた。案外律儀だ。

進弥はニヤリと笑い、先ほどから気になっていた、少女の脇に置

かれた缶酎ハイを取り上げた。

「代金はこれでいいよ」

「ああ！ あたしのヤケ酒返して！」

少女は取り返そうと手を伸ばす。進弥はその手を叩いて、缶を指差した。

「ふざけんな、未成年。お酒は二十歳になってからって、ここに書いてあるだろ？」

「説教？ あんたはどうなのよ！」

確かにこの少女との年の差は、真純との半分も離れていないかも知れない。

進弥はニツと笑い、少女の目の前で缶酎ハイのプルタブを起こす。

「オレは二十一。立派なオ・ト・ナ」

そしてわざとらしく、酎ハイを煽って見せた。少女は頬を膨らませて進弥を睨む。

早生まれの進弥は先月二十一歳になった。十月生まれの真純とは、期間限定で年の差がひとつ縮んでいる事になる。それがちよつとだけ嬉しかった。

少女はふてくされたように恨み言を言う。

「フンだ。三つしか違わないじゃない。二十歳前後の奴って、すぐ大人ぶるんだから。あいつと一緒に」

「誰と一緒にだって？」

少女は俯いて表情を曇らせた。

「……あたしのカレシ」

「なんだ、そいつとケンカして泣いてたのか」

「違う。ケンカなんてしてない。けど……」

なんとなく、この少女からは自分と同じ匂いがする。訊いてもいないのに少女は、泣いていた理由を語り始めた。そして進弥も、聞くつもりはなかったのに、なんとなく耳を傾けていた。

それでも、猫が好き！ (4)

少女の彼氏は大学生だという。高校で知り合い、付き合い始めたが、彼が大学に進学して、滅多に会えなくなった。

メールや電話でのやり取りは、ほぼ毎日あるが、バイトやサークル活動で忙しい彼と、会えるのは月に数えるほどだという。

大学で新しい彼女でも出来たのではないかと疑った事もあったが、どうやらそうではないらしい。彼の高校時代の友人にそれとなく尋ねたら、彼女同様付き合いが悪くなっていた。

どうもサークル活動に夢中になっているようで、メールも電話もその事に終始している。

「何やってんの？ おまえのカレシ」

「ゲーム作ってるみたい。あたし、あんまりゲームしないから、よくわかんないの。あいつの話」

いつもは少女にとって、わけのわからない話ばかりする彼が、珍しく今日花見をしようと誘ってきたらしい。

久しぶりのデートの誘いに、少女は思い切り舞い上がった。バツチりおしゃれして、待ち合わせの時間より一時間も早く出かけて待っていた。

ところが、突然彼からキャンセルされたのだ。サークル仲間との花見の予定が入ったからと。

自分の方から誘っておきながらドタキャンしてすまないと彼に平謝りされ、怒る事も言い返す事も出来ないまま、一方的に電話は切れた。

夜桜見物をするからと家族に告げてきた手前、早々に帰るわけにもいかない。時間をつぶすために歩き回っていたら、おろしたての新しいサンダルでマメが出来るわで、なんだか情けなくなって泣い

ていたらしい。

話を聞いた進弥は、思い切り大きなため息をついた。

この世の終わりでも訪れたかというほど号泣していたから、何事かと思えば、実に些細なすれ違いだったのだ。

酎ハイを飲みながら、ボソリとつぶやく。

「くっだらねー」

「くだらなくないもん！ 久しぶりのデートだったのに！ あたしの方が先に約束してたのに！」

「オレに怒ったってしょうがねーだろ」

わめいた後少女は、俯いて再び目に涙を浮かべた。

「あたし、本当にあいつの彼女なのかな……」

どうりで同じ匂いがすると思った。やはりこの少女は、自分と同じ不安を抱えていたのだ。

進弥は缶の底で、少女の頭をコツンと叩いた。

「泣くな。別にふられたわけじゃないだろ？」

「叩かないでよ！」

少女に元気が戻った事で、少しホッとした。泣かれるよりは断然いい。

この時間だと、ほとんど人通りはないが、それでも時々人が通るのだ。自分が泣かせていると思われるのは心外だ。

「オレにわめいてないで、本人に言えば？」

「言えないよ。ただでさえ子供扱いされてるのに、やっぱり聞き分けのない子供なんだって思われたくないもん」

「実際に子供なんだから、子供だって思われたっていいじゃん」

「もう！」

少女はムツとした表情で進弥を睨んだ。進弥はかまわずに続ける。「どうせ子供でいられるのもあと少しなんだし、今の内に子供の特権、思う存分行使した方が得だと思うけどな。あんまり聞き分けがよすぎるより、少しぐらいなら、わがまま言って甘えてくれる方が嬉しいもんなんだよ」

「そうなの？ うざくない？」

目を丸くして身を乗り出す少女に、進弥はクスリと笑った。

「そりゃあ、わがままばっかだと、うざいけど、全く甘えてくれなものも寂しいよ。そんなに頼りないのかなあって」

思わず本音を漏らすと、少女は目ざとくそれを察知して、ニヤリと笑いながら進弥の顔を覗き込んだ。

「やけに実感ももってるけど、あんたの彼女って甘えてくれないの？」

「全然。すごいクール。ってか、オレの事はどうだっていいだろ」「ええーっ？ あたしの話だけ聞いてずるい」

「おまえが勝手に話したんだろ？」

同じ匂いがするせいか、この少女にはいつい本音を漏らしてしまふようだ。

進弥の飲む酎ハイの缶を見つめて、少女が訴えた。

「ねえ、喉渴いちゃった。それ返して」

進弥はニヤリと笑い、問いかける。

「何？ オレと間接キスしたいの？」

すぐさま少女は、真っ赤になって怒鳴った。

「誰があんたなんかと！ あたしの唇はあいつのものだもん！」

こういう反応は、やっぱり若いなあと思う。真純には小馬鹿にされた事を思い出した。

進弥は笑いながら、カフェオレのペットボトルを差し出した。

「ほら。これやるよ。まだ開けてないから」

「なんか生ぬるーい」

受け取ったペットボトルを、文句を言いながらも開ける少女を横目に眺めていると、携帯電話がメールの着信音を鳴らした。

進弥はポケットから電話を取りだし確認する。真純からだった。

メールを開いて文面を目にした途端、思わず顔をしかめる。

「”バカ”って何？」

隣から少女が手元を覗き込んでいた。進弥は慌てて電話を閉じる。

「覗くなよ。おまえオレには遠慮なしだな」

少女は益々無遠慮に突っ込んできた。

「ねえねえ、今のカノジョ？　もしかして、あんたの方がカノジョとケンカしたの？」

「だから、オレの事はどうだっていいだろ。さっさと絆創膏貼って家に帰れ。充分時間はつぶせただろう」

「もおお。教えてくれたっていいじゃない」

少女はブツブツ言いながら、足に絆創膏を貼り始めた。ベンチに乗せていた足に貼り終え、もう片方の足にも次々に貼っていく。

どれだけ相性の悪いサンダルを履いていたんだ、と半ば呆れながら眺める。

少女は絆創膏だらけの足に再びサンダルをはき直して、その場で数回足踏みをした。

「大丈夫そうか？」

「うん」

「じゃあ、気をつけて帰れよ」

「ありがとう」

礼を言っただけ少女は立ち上がった。そしてイタズラっぽく笑いながら、進弥の顔を覗き込む。

「あんたもカノジョと仲直りしたら？」

「余計なお世話」

進弥が顔をしかめると、少女は腰に手を当てて、得意げに胸を反らした。

「だって、カノジョは仲直りしたがってるもん。どうしてもよかったらメールなんて送ってこないよ」

「あんなメール……」

反論しようとした時、再びメールの着信音が鳴った。

進弥は電話を取りだし確認する。またしてもちゃっかり、少女が覗き込んだ。

「”お願い”って、何か頼まれてたの？」

「いや……」

前のメールとの、繋がりが読めない。意味が分からず、進弥は首を傾げながら、少女と顔を見合わせた。

それでも、猫が好き！ (5)

少女がハッと何かに気付いたように、進弥の腕を掴んで揺すった。
「ねえ！ さっきのメール、続きがあったんじゃないの？」

言われてみればそんな気がしてきた。少女に覗かれて慌てて閉じたので、ろくに確認していない。

進弥は先ほどのメールを、もう一度開いた。よく見ると横にスクロールバーが出ている。やはり続きがあったのだ。

親指でスクロールさせると、大量の空白行の後、文字が現れた。

—— ごめん。帰ってきて。 ——

「やっぱり！ 彼女が謝ってるのに、あんた無視しちゃったのよ」
再び進弥の隣に座った少女が、当たり前のように手元を覗き込みながら、進弥の腕をバシバシ叩く。

「おまえが覗くから、よく見れなかったんじゃないか」
ムツとして反論するも、少女はお構いなしに促す。

「いいから早く連絡しなさいよ」
なんでおまえが仕切るんだと思いつつも、進弥は真純の番号を呼び出して発信した。

固唾を飲んで見つめる少女を横目に応答を待つ。繋がった途端メッセージが流れた。

「え、なんで？」

進弥は一度電話を切り、もう一度かけ直す。ところが、繋がった途端、またメッセージが流れた。

「繋がらない……」

電話を握りしめて呆然とつぶやく進弥に、少女が呆れたように言う。

「もう。無視するから怒ったんじゃないの？」

それなら、まだいい。

進弥の胸に不安が広がっていく。

「オレ、帰らなきゃ」

進弥が立ち上がると、少女も立ち上がった。

「うん。あたしも帰る」

一緒に土手を降りて、コンビニの前で少女と別れた。反対方向に歩いていく少女を、少しの間見送った後、それに背を向け進弥は駆け出した。

自分の態度に怒って電源を切っているだけなら、まだいい。

だが、以前のように誰かに連れ去られて、連絡の出来ない状態にあるのだとしたら――。

そうでない事を祈りつつも、胸の不安はどんどん膨らんでいった。

家にたどり着き玄関の扉を開けると、一階の灯りは消えていた。家を出る時からそうだったので、それは問題ない。

真純は二階に上がろうとしていた。自分の部屋にいるのかもしれない。

進弥は二階に上がり、真純の部屋の扉をノックした。返事はない。怒っているなら当然な気もする。

ゆっくりとノブを回してみる。すると、あっさり回った。中に真純がいるなら、鍵が掛かっていると思っていた。

不安と共に、胸の鼓動が激しくなってくる。

「真純さん……」

声をかけながら、恐る恐る扉を開く。中を覗くと灯りは消えてい

た。一通り見回して、ドクリと鼓動が跳ねた。

ベッドは平らなままで、眠っているようには見えない。つまりここにはいない？

壁のスイッチを探り、思い切って灯りを点けてみる。

部屋のどこにも真純の姿はなかった。

進弥はすぐに、階段を駆け下りた。二階には他に、進弥の部屋しかない。家の中にいるとしたら、一階のどこかだ。

トイレも風呂も灯りは点いていない。入浴中とかではないようだ。一階の灯りを次々に点けながら確認していく。

リビング、キッチン、ダイニング、真純の仕事部屋、テラス、どこにも真純の姿はない。テラスを出て庭を見渡したが、そこにも真純はいなかった。

もう一度電話してみるが、やはり不通のままだった。

進弥は力なくテラスにしゃがみ込む。真純はいつたいどこへ――。すっかり無縁になったと思っていた、半年前の悪夢が進弥の脳裏に蘇った。

それでも、猫が好き！ (6)

半年前の時は、携帯電話にメールが送られてきた。だが今回は何もない。

あの時と同じ奴だとは考えにくいが、真純が連れ去られたのだとしたら、何か要求があるはずだ。

あの頃、裏稼業で使っていたメールアドレスは廃棄したが、もしかしたら自分のパソコンにメールが来ているかもしれない。

ほとんどゼロに近い可能性に一縷の望みを託して、進弥は立ち上がり、のろのろと二階へ向かった。

考えてみれば、真純の親族の連絡先を進弥は知らない。自分のせいじゃなかったとしても、行方不明になったのだとしたら、知らせなければならぬだろう。

明日になっても真純の行方が分かなければ、とりあえず真純の親友でもある自分の上司、辺奈課長に知らせようと思った。

自室に入った途端、ギクリとして進弥は足を止めた。

カーテンを引いていない窓から射し込む月明かりの中、ベッドの布団がこんもりと盛り上がっているのが見て取れた。

泥棒や不法侵入者なら、こんなあからさまな隠れ方はしないだろう。

進弥は駆け寄り、布団の端をそっとめくる。はたしてそこには、猫のように丸くなった真純が潜り込んでいた。手には携帯電話が握られている。

一瞬、進弥と目が合った真純は、素早く布団の端を奪い返して、再び中に閉じこもった。

どうして電源を切った電話を握りしめているのか。そもそもなぜ電源を切ったのか。真純の性格からして、進弥を誘うためではない

だろうが、どうしてこんなところにいるのか。

色々訊きたい事はある。

進弥はベッドに腰掛けて、布団の上から真純の身体をポンポン叩いた。

「よかった。心配したよ。また攫われたかと思って」

無意識に口をついて出たのは、安堵の言葉だった。

布団の中で真純が、ボソボソと何かを言っている。進弥は身を屈めて、布団に耳を近付けた。

「……ウソつき。どこにも行かない。ずっと側にいるって言ったくせに……」

普段の真純からは想像もつかない、すねた口調と涙声に、驚くと同時に胸が痛む。メールを無視したから、ヤケ酒でも飲んで酔っているのだろうか。

進弥は思わず、布団ごと真純を抱きしめた。

「ごめん。もうどこにも行かないよ。お願いだから出てきて」

「イヤ……。ウソつきは嫌い」

進弥の腕を逃れるように、真純は益々奥へと潜り込む。進弥は身体を起こして、もう一度布団の上から、真純の背中をポンポン叩いた。

「それでも、僕は真純さんが好きだよ」

「どうして？ どうして私なの？ 私なんかより、もっと若くて、素直で、かわいい子の方がいいんじゃないの？ 私なんて、ただおまえを拾っただけだし。この家だって私のものじゃないんだし、おまえが恩を感じる必要なんてないよ」

真純が一線を引いている理由が、なんとなく分かった。真純は自分に自信が持てないから、進弥の気持ちを信じ切れずにいたのだろう。

—— 本当に愛されているのだろうか ——

真純も同じ不安を抱えていたのだ。

ほんの少しケンカして、進弥が家を飛び出ただけで泣いてしま
うほどこに。

自分が真純の中で、それほど大きな存在である事に気付き、進弥
は舞い上がりそうなほど嬉しくなった。

「真純さんは、いい女だよ。年下だからって僕の事を甘やかしたり
しないし、だけどちゃんと気遣ってくれるし。素直じゃないのは、
猫だから仕方ないよね。それでも僕、猫が好きだから」

真純が布団の端を少し浮かせた。進弥の様子を探っているようだ。
そんな姿が益々猫っぽくて、進弥はクスリと笑った。

途端に真純は、布団の端を閉じる。進弥は布団の上から、真純の
身体を揺すった。

「ねえ、そろそろ出てきてよ」

「やっぱイヤ」

「なんで？」

「だっておまえ、そういう女のところに行っただんしょ？ そんな奴
に触られたくない」

これってヤキモチ？

思いがけずに垣間見えた真純の独占欲に、緩みそうになる顔を必
死で引き締める。まずは誤解を解かねば。

「行ってないよ。頭冷やそうと思って、河川敷まで桜を見に行っただけ」

「本当？」

「命、賭けてもいい」

布団がモゾモゾと動いて、むくむくと盛り上がる。そして頭から
布団をかぶったまま、ベッドに座った真純が姿を現した。

薄暗い室内で、窓に背を向けた真純の表情は読み取れない。

近付こうと身を乗り出した時、真純の方から進弥の首に腕を回し

てしがみついてきた。

予想外の真純の行動に、進弥は一瞬硬直する。

耳元で真純が、消え入りそうなほど小さな声でつぶやいた。

「もう帰って来ないかと思った」

進弥は真純の小さな身体を引き寄せ、ギュッと抱きしめる。

「そんなわけないじゃん。僕のせいなのに。僕がガキで頼りないから、真純さんは僕と付き合ってるの恥ずかしいんだよね」

「え？」

真純が顔を上げ、驚いたようにこちらを見つめた。

「違うよ。私がシンヤみたいな若い子と付き合ってる事を、高木くんに知られた事が恥ずかしいの。私、あいつに嫌われてるから、絶対からかわれるに決まってるもん」

真純の恥ずかしがっている理由が、全く見当違いだった事が判明し、進弥は思い切り脱力した。

「なんだ、そうだったんだ。もう、真純さんって分かりにくいよ」
思わず愚痴ると、真純は口をとがらせて反論した。

「おまえだって分かりにくいよ。二重人格だし」

「そうかなあ。じゃあ、オレが今、何を考えてるか当ててみて」

真純は少しうつむき加減に上目遣いで、進弥の顔をまじまじと見つめる。そしてボソリとつぶやいた。

「……エロい事、企んでる」

「あつたりーっ。ほら、分かりやすいでしょ？」

間髪入れずに答えて、進弥は真純をより一層抱きしめた。

本当はキスをしたいと思っていただけだが、真純がそう思っているなら、あえて否定しない事にする。なにしろこんなチャンスは、この先また当分やって来ないかもしれないから。

「じゃあ、いいよね？」

耳元で囁くと、真純はピクリと身体を震わせた。そして両腕を突っ張って、進弥から身体を離れた。

「今はイヤ」

「なんで？」

高まりかけていた気持ちに水を差されて、進弥は不満げな声を漏らす。てっきり真純もその気だと思っていた。相変わらず真純は、つかみ所がなくて分かりにくい。

真純は進弥を見据えて、キッパリと言い切った。

「ウソついた罰」

「ええっ？」

真純を泣くほど不安にさせた事に、非はあるかもしれない。だが、元々どこにも行くつもりはなかったし、好かれてなくても側を離れたくないという思っていた。ウソをついた覚えはない。

腑に落ちない気もするが、ここはおとなしく従うのが大人の対応なのだろう。

進弥が黙っていると、真純は俯き、小さな声で懇願した。

「お願い……もう少し待って」

真純の手が進弥のシャツをギュッと掴む。

また怒って出て行くとしても思われたのだろうか。再び不安そうになった表情を見て、進弥は微笑みながら真純の頬に手を添えた。

「うん。無理強いはしないよ。でもキスはいいい？」

真純が小さく頷いたのを確認して、進弥はそっと口づけた。

それでも、猫が好き！ (7)

昼食後、進弥は、二階のカフェに向かった。とにかく眠くてしょうがなかったので、濃いめのコーヒーを飲みたかったのだ。

エスプレッソを買って席につき、午前中かみ殺していた大あくびを、心置きなくしているとところへ、横から声が掛かった。

「眠そうね。ここ、いい？」

慌てて口を閉じ横を向くと、トレイを持った辺奈課長が笑いながら立っていた。

進弥は苦笑しながら促す。

「お疲れさまです。どうぞ」

課長は進弥の前に座り、コーヒーをかき混ぜながら、イタズラっぽく笑った。

「ゆうべ頑張り過ぎちゃったの？」

「え……」

頑張ったと言えば、頑張った。別の意味で。

あの後、真純は自分の部屋に帰らなかった。床に寝るから側にいさせて欲しいと言うので、そういうわけにも行かず、一緒にベッドで寝たのだ。

真純は安心したようによく眠っていたが、進弥の方は変に意識してしまって、ほとんど眠れなかった。おかげで朝から、あくびをかみ殺していたのだ。

進弥が絶句していると、課長はおもしろそうにフツツと笑った。

「冗談よ。セクハラだったわね」

進弥も曖昧な笑みを浮かべてお茶を濁す。互いに笑い合った後、課長が真顔で尋ねた。

「冗談はともかく、何かあったの？ あの子、朝元気がなかったの

よ。ちょうどあの時みたいに」

「あの時？」

「あなたが出て行った時よ」

進弥がハッカーだと発覚した時、真純は課長の命令で進弥を家から追い出した。それは真純にとって、進弥との永遠の別れを意味していたようだ。

翌日に真純は、課長に家の鍵を付け替える事を告げ、目の前で携帯電話から進弥の番号とメールアドレスを消去したという。

課長としてはそこまでは要求しなかったし、求めてもいなかった。なにしろ進弥の顔を知っているのは真純だけだ。ほとぼりが冷めた頃、外で会っていたとしても分からないのだ。

「私だったらウソついてまた拾っちゃうかもしれないけど、あの子、生真面目だから」

そう言って課長は、笑った。

完全に進弥との繋がりを失った真純は、すっかり元気をなくした。本人は平気を装っていたけど、課長には丸わかりだったらしい。

「かわいそうだったわ。なんであなたハッカーなのよって恨んだわよ。だってあの子にとって初めて出来た男なのよ、あなた」

「へ？」

初めてだとは聞いていたが、その段階から初めてだったとは夢にも思っていなかった。

「小中学校の頃は知らないけど、あの子の性格からして、多分ないわね」

呆然とする進弥を気にも留めず、課長はひとり納得して頷いている。

「まあ、何があったら知らないけど、あの子、あなたがまたいなくなるんじゃないかって不安になってるのよ、きつと。優しくしてあげてね。恋愛には疎い子だから」

「はい……」

課長はコーヒーを飲み干し、席を立った。

「じゃあ、ごゆっくり。私が余計な事を話したのは、内緒にしてね」

そう言って笑いながら、課長はカフェを出て行った。

進弥は生ぬるいエスプレッソを眺めながら、ぼんやり考える。

あの時の別れが、真純にとってそれほど重いものだったとは、考えてもいなかった。

自分自身は、何とかして堂々と真純の元へ戻れる手立てばかり考えていたから。

――行かないで。ずっと側にいて――

酔った真純が半泣きで口にした言葉が、脳裏に蘇る。

あれは親友の課長にすら明かす事が出来なかった、真純の心の叫びだったのだ。

真純の想いははっきりと分かった。もう彼女の気持ちを疑って、不安になる事はないだろう。

後は自分を真純に信じてもらうだけだ。元々信頼度はマイナスから始まっている。今どの程度までプラスに転じているのか、或いはマイナスのままなのかは不明だ。

恋愛には疎いと言っても、人生経験は真純の方が上だ。同年代の子に対するアプローチと同じでは、盛りのついたオス犬だと思われる。でも仕方ない気がする。

上辺だけの優しさや愛情の押し売りは、警戒心の強い猫には通用しない。まずは信頼を得なければ。

進弥がカップを手を取った時、ちょうど午後の始業開始十分前を知らせる予鈴がなった。

すっかり冷め切ったエスプレッソを、一気に喉へ流し込み、進弥は職場へ戻った。

それでも、猫が好き！ (8)

約束の週末が来た。

朝からカラッと晴れて、絶好の花見日和だ。

あの日から真純は、部屋に鍵をかけなくなった。最初の二日は、夜中に進弥の部屋を覗きに来た。

不安で眠れないならと、以来一緒に寝ている。ただ一緒に寝るだけ。

それでも、自分の腕の中で眠る真純が、安心した表情で寝息を立て始めると、進弥も満足できた。

三日経った今では、真純もすっかり元通りに素っ気なくなった。

今夜は自分の部屋で寝るのかもしれない。そう思うと、ちょっと寂しい気もした。

進弥が物思いにふけっている間も、真純はいそいそと花見の準備に余念がない。

トイレがないので、そんなに長居は出来ないが、一応酒とつまみを持って行こうという事になった。

花見といえばビールだろうと主張する進弥に、だからこそ意表を突いてワインだと真純は言い張る。結局真純の案を採用し、白ワインのフルボトル一本とグラス二個、パンとチーズとハムを持って河川敷の桜並木に向かった。

先日夜に進弥が来た時は、桜はまだ七分咲きくらいだった。今日はすっかり満開で、時折吹く風にハラハラと花びらを散らし始めている。

さすがに週末だけあって、腰を据えてはいないものの、チラホラと花見客の姿がある。

空いたベンチを探して遊歩道を歩いていると、少し先で立ち止ま

ったカップルが目についた。

眩しそうに桜の花を見上げた少女の横顔に、進弥は見覚えがある。あの夜、ベンチで泣いていた少女だ。

あの日はフワフワしたワンピースに踵の高いサンダルを履いて、少し大人っぽい格好をしていたが、今はデニムのミニスカートにスニーカーと、随分カジュアルな服装だ。

まだ足のマメが完治していないのかなと思い、進弥はクスリと笑う。

まさかそれに気付いたわけではないだろうが、少女が不意にこちらを向いた。

進弥と目が合った少女は少しだけ笑顔を見せ、隣にいた青年の腕に掴まりながら、そのまま桜並木を遠ざかっていった。

ちゃんと仲直りできたようでホッとした。多分少女も同じ事を思っ
て、微笑んだのだろう。

進弥は隣を歩く真純の手をそっと握った。

少し驚いたように、真純は進弥を見上げる。

外でベタベタするなど、手を振り払われるかもしれない思ったが、意外にも真純は、黙って進弥の手を握り返した。

進弥は心の中で、密かに誓う。

この手を決して離さないようにしよう。二度と真純を不安にさせないように。

(第2部 完)

サイン

いつものように辺奈商事本社ビルの二階で、書類の受け渡しがりなく終了した。

このところハルコが反抗期だとかで、瑞希は常に忙しそうにしている。今日も真純がコーヒーを飲み終わるのを待たずに、先にカフェを出て行った。

残された真純は、のんびりとコーヒーを飲み干し、トレイを持って席を立つ。何気なく出入口に目を向けると、そこにいた男と目が合った。

社内で一番会いたくない奴、高木だ。

気付かぬフリをしてやり過ごそうにも、バッチリ目が合ったことを相手も把握している。

その証拠に、こちらを向いてヒラヒラと手を振りながら、ニヤニヤと笑い出した。

こいつが自分に対して、友好的な態度を取る理由などない。おそらくシンヤと付き合っていることを、からかうつもりだろう。

不愉快きわまりないが、出入口はひとつしかない。真純は腹を括って、出入口に向かった。

店の外へ出た途端、高木が親しげに話しかけてきた。

瑞希はもう上に上がったのかと訊かれ、それに答える。こいつがそんな事を訊くために、わざわざ声をかけたとは思えない。

警戒心を露わにしたまま、真純が見上げていると「ところで」と高木は切り出してきた。

「須藤さん、舞坂と付き合ってるそうですね」
「それが何？」

今さらとぼけても無意味だし、挑発に乗ってはいけないと思いつつも、言葉がトゲを持つ。

高木は真純の態度など気にした風でもなく、ヘラリと笑った。

「いやー。よかったと思っただんですよ」

何がよかったんだか、意味が分からない。

「なんでおまえに喜ばれなきゃならないの？」

思い切り怪訝な表情をする真純に、高木は言葉を続けた。

「須藤さんって、男はみんな敵だとも思ってたから、ちゃんと男を好きになれる人だったんだ。よかったなあって」

そういえばこいつは、ヒマさえあれば合コンを仕切っているような奴だった。

シンヤも誘われたらしい。真純も友人に年上好きがいるからと紹介されそうになり、激しくお断りした事を思い出す。

男と女がいれば、そこには必ず恋愛感情が芽生え、誰もがパートナーを欲していると決めつけている。

彼氏がいないのに紹介を断る真純を不思議がっていたが、「男は敵だと思っている」と結論づけていたらしい。

こいつの思考回路は、やっぱりよく分からない。

真純は思いきり肩を落として、大きくため息をついた。

「私を敵だと思っているのは、おまえの方でしょ？」

高木は意外そうに二、三回まばたきをした後、顔の前で激しく手を振った。

「いやいやいや、嫌われてるのはオレの方でしょ？ 須藤さん、ひどく怒ってたし。そのまま自宅勤務になっちゃって、飲み会にも全然来なくなったし。敵どころか仕事頼めなくなって残念に思ってるんですよ。だって須藤さんって、仕事早いし正確だし」

今度は真純の方が目を丸くした。高木は真純の仕事を軽く見ていると思っていた。だから、いくら注意されても遅刻癖が直らないのだと。

仕事の出来を高評価されている事が意外だった。そしてそれは多

分本当の事なのだろうと思ひ至る。

自宅勤務にしてもらった時、瑞希が「高木くんが残念がるわよ」と意味不明な事を言っていたのだ。当時は本当に意味不明だった。高木に残念がられる要素は何もない、と思っていたからだ。

高木は飄々として調子のいい奴だが、案外仕事の出来る奴だと真純も認めていた。そうでなければ、瑞希がチームリーダーという責任のある仕事を任せたりはしないだろう。

システム開発の仕事について真純はよく分からないが、高木が真純に与える指示は、簡潔で的確で分かりやすかった。

ただ遅刻癖だけが、どうしても腹に据えかねたのだ。

互いに勘違いしていた事がおかしくて、真純はクスリと笑った。

「私もおまえが嫌いなわけじゃないよ。ただ一緒に仕事したくないだけ」

真純がそう言うのと、高木は頭をかきながら笑う。

「相変わらず手厳しいなあ、須藤さんは」

一応、高木も努力はしていると言う。

目覚まし時計を十分間隔で鳴るように、部屋のあちこちにセットしてあるらしい。それでも三日に一度は寝過ごしてしまうというから、かなりの強者だ。

他人の世話ばかり焼いてないで、自分が毎朝起こしてもらえる嫁さんをもらえばいいのと言うと、そんな心の広い女の子はなかなか見つからないらしい。

寝過ごしてデートや記念日の約束をすっぱかしてしまい、過去何度も破局したと苦笑混じりに白状した。

光景が容易に想像できるだけに、真純は思わず吹き出した。

「たまには飲み会にも来て下さい」

そう言い残して、高木は笑いながらビルの奥に消えていった。それを見送り、真純も家路につく。

高木とのわだかまりがなくなり、高かった会社の敷居が、少しだけ低くなったような気がした。

キッチンで夕食の支度をしていると、玄関でコトリと音がした。

そろそろシンヤが帰ってくる時間だか、シンヤはいつも大声で挨拶しながら、久しぶりに主人に会った子犬のようにバタバタと駆け込んでくるので、家のどこにいてもすぐ分かる。

シンヤにしては静かすぎるので、何か落ちたのかと思い、真純はキッチンを出て玄関の様子を見に向かった。

リビングを素通りして玄関へ続く廊下の扉を開けた途端、目の前にいたシンヤにぶつかりそうになった。思わず声を上げて一歩退く。さっきの物音はシンヤだったようだ。シンヤも驚いたようで、一瞬目を見張ったものの、すぐに真顔に戻って、じっと真純を見つめた。

「びっくりした。おかえり」

シンヤは真純の声にも反応がなく、ただじっと見つめている。

様子がおかしい。冬に風邪をひいて熱を出した時でも、ここまでおとなしくはなかった。

「どうしたの？ 具合でも悪いの？」

首を傾げながら、真純はシンヤを見上げる。するとシンヤは、持っていた荷物をポトリとその場に落とし、いきなり真純を抱きしめた。

いきなり抱きしめられるのはいつもの事だが、今日は様子が違う。痛いほどに強く抱きしめられ、足が宙に浮いたところを壁に押しつけられた。

そして真純が抗議の声を発する前に、シンヤは自らの唇で口を塞いだ。

唐突なキスもいつもの事だが、あまりにも唐突で激しすぎて、真純の頭は混乱する。

掴まれた肩が痛い。なんだか怒っているようにも思えるが、何を

怒っているのか見当もつかない。

息苦しくて、わけが分からなくて、真純はシンヤの胸を拳で叩いた。

シンヤがハッとしたように唇を離した。

「なんなの。いったい」

困惑に眉を寄せて、睨み上げる真純に、シンヤは目を逸らしポツリとつぶやいた。

「……ごめん」

手を離れたシンヤは、俯いたまま黙り込む。

やはり様子がおかしい。具合が悪いわけではなさそうだが。

真純が問い質そうとした時、キッチンからカタカタと音が聞こえて来た。

「あ！ 鍋を火にかけたままだった」

真純はシンヤをその場に残し、慌ててキッチンに駆け戻る。幸い吹きこぼれてはいなかった。

「うーん。底の方がちよつと焦げちゃったかなあ」

鍋の中をかき回していると、後ろからシンヤの声がした。

「今日はカレーなんだね」

振り返ると、少し笑いながら、シンヤが鍋の中を覗いている。さきほどの暗い様子はなくなって、いつもより少しおとなしめのシンヤがいた。

ホッとした真純も、笑顔を返す。

「うん。おまえ、好きだし。明日の方が絶対おいしいから、今日全部食べないでよ」

「さすがにこれ全部は無理だよ」

おどけたように笑うシンヤは、すっかりいつもの犬かぶりシンヤだった。

——とはいえ、やはり帰ってきた時の様子が気になる。

夕食の後、一緒にテレビを見ながら、真純は意を決して尋ねた。

「会社で何かあったの？」

「ん？ 別に……」

平静を装って、シンヤは否定する。

あれだけあからさまに様子がおかしかったのに、ごまかそうとしてもそうはいかない。

「何もないなら、どうして帰ってきた時変だったの？」

「変って……」

黙って互いを探るように見つめ合う。少ししてシンヤが観念したのか、目を伏せて大きくため息をついた。気まずそうにチラリとこちらを見て白状する。

「笑わないでよ……」

そう前置きをして、シンヤは会社であつた事を話し始めた。

客先での打ち合わせに向かう途中、偶然、高木と話している真純を見たという。高木の事を嫌っていると思っていた真純が、楽しそうに笑っているのを見てモヤモヤしたらしい。

それが子供じみた嫉妬だという事は分かっていたし、真純が高木に対する恋愛感情を持っていない事も分かっていたが、どうしても気持ちが収まらなかったようだ。

「真純さんの気持ちは信じてるし、オレって心が狭いなって思うけど、気に入らないんだよ。あんな笑顔が僕以外の男に向けられるのは。真純さんが自宅勤務でよかったって心底思った。会社に通ってたら、毎日こんな思いしなきゃならないなんて、それこそ気が変になりそう」

ふてくされたように口をとがらせるシンヤが、なんだかわいい。真純はソファの上に上がり、ひざ立ちになって、横からシンヤの頭を抱きかかえた。

「大丈夫だよ。いくら楽しそうに話しても、他の奴なんて眼中にないから」

シンヤは真純の腰にそっと腕を回し、身体を引き寄せる。

「真純さん。たまにそういう事して、僕を煽るのはやめてくれる？」
煽っているつもりはなかった。安心させたかっただけだ。それに

”真純さん”だし”僕”だったから油断した。真純が気付いた時には、ソファに押し倒され、シンヤにのしかかれていた。

デジャヴを覚える。以前もここで、こんな事があったような――。黒シンヤは長い腕を伸ばし、ローテーブルに置かれたリモコンを取って、素早くテレビを消した。

そして真純に顔を近付け、邪魔者はいなくなったとばかりに、ニヤリと笑う。

「今すぐ真純をオレだけのものにしたくなった」

「ええ?! ここ、ソファだし」

あまりに唐突な展開に真純はうろたえながら、シンヤの肩に手を置いて身体を押し戻した。しかしシンヤは余裕の笑みを浮かべながら、あっさり真純の手を外して言う。

「じゃあ、ベッドに行こうか」

「いや、待って。まだお風呂に入っていないし、心の準備が……!」
「わめきながらも自分でツツコミを入れたくなる。一緒に住んでいるが、互いの気持ちも確認しているのに、いまさら心の準備など間抜けすぎる。」

今日は彼の家にお泊まりだから、もしかして……という乙女心の機微とか、事前の覚悟とかありえない。

元々黒シンヤは唐突なのだから、唐突にその時がやってくる事ぐらい、常に意識して然るべきだ。

ただでさえシンヤには長い間、お預けを食らわせている。わざとではないにしても、あんまり長引かせては、瑞希が言ったようにかわいそうな気がする。

でもお風呂ぐらいは入らせてもらえないだろうか。この時期、半端なく汗をかいているのだ。

そんな事を考えながら、真純が必死に覚悟を固めようとしていると、目の前でシンヤがクスリと笑った。

「冗談だよ。そんな顔しないで」

（あれ? もしかして犬が帰ってきた?）

シンヤはソファに座り直し、真純の手をとって身体を引き起こした。

拍子抜けして唾然とする真純に、シンヤは苦笑する。

「そんなにホッとされても複雑だけど、でも僕、真純さんがその気になるまで、何年でも待つよ。だってもう二度と泣かせたくないし、失いたくないから」

どうしてそういう事をサラリと言うのだろう。胸の奥が甘い痛み
に疼いて、今すぐにでも許してしまいたくなるではないか。

でもそれを口にするのは恥ずかしいので、グッと踏みとどまる。

シンヤはイタズラっぽく笑いながら提案した。

「そうだ。真純さん分かりにくいから、その気になったら僕に合図してよ」

「合図って、どんな？」

「キスして。真純さんから」

「え……」

それは強引に押し倒されて、なし崩し的に許してしまうより、ハ
ードルが高いような気がする。

顔を引きつらせる真純を見て、シンヤが吹き出した。

「唇じゃなくてもいいよ。ほっぺでも手でも」

「……うん。それならいい」

真純はホッと息をつく。奥手な真純にシンヤが最大限気を遣って
くれているのが嬉しくて、思わず彼の腕にしがみついた。

「だから、そういうかわいい事しないで」

不満そうにそう言うと、シンヤは真純の手をほどき、肩を抱き寄
せた。

見上げる真純を見つめて、シンヤは微笑む。

「我慢できなくなるでしょ？」

そして唐突に口づけた。

今度のキスは、いつものように唐突だけど、いつものように優し
くて甘かった。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5603q/>

猫が好き！

2011年8月20日14時26分発行